

編集発行
群馬大学医学部同窓会

発行責任者 飯野 佑一
編集責任者 福田 利夫
〒371-8511
前橋市昭和町三丁目39-22
電話027-220-7861(ダイヤルイン)
FAX(電話兼用)027-235-1470

刀城クラブホームページ <http://tojowww.dept.med.gunma-u.ac.jp/> 同窓会事務局メールアドレス tojoclub@ml.gunma-u.ac.jp



医学部生協

目次

退任教授記念送別会 同窓会長 飯野 佑一 2~4

退任あいさつ

眼科学	教授 岸 章治 5
整形外科	教授 高岸 憲二 6
保健学研究科	教授 福田 利夫 7
生体調節研究所・シグナル伝達分野	教授 岡島 史和 8
卒業おめでとう	同窓会長 飯野 佑一 9
平成27年度卒業生名簿	 10
群馬大学医学部 附属病院の医療事故		
—その後の取り組みと今後の支援—		
同窓会長 飯野 佑一・前会長 森川 昭廣		11
新任教授紹介		
肝胆膵外科	教授 調 憲 12
母校に望む ^㉔		
利根中央病院	院長 糸賀 俊一 13
水芭蕉 ^㉕		
帝京大学医学部病院病理科		
教授 笹島ゆう子	 14

医療人能力開発センターだより^㉖

地域医療支援部門 講師 羽鳥 麗子 15

平成27年度パジャジャラン大学交換交流学生の歓迎会 16

パジャジャラン大学交換留学実習報告 17~19

学会報告 (同窓会補助)

前橋赤十字病院	院長 中野 実 20
麻酔神経科学	教授 齋藤 繁 20
腫瘍放射線学	教授 中野 隆史 21
国立成育医療研究センター 臓器移植センター長	笠原 群生 21
支部だより	 22~24
クラス会だより	 25~28
「卒前・卒後一貫MD-PhDコース」学内リトリート報告	 29
医学部代表者および新任教授との懇談会報告		
幹事長 白倉 賢二	 30
財団のページ	 31~32
平成27年度版同窓会会員名簿発行のお知らせ	 33
役員会だより	 33~34
学内人事・学外人事・謹告	 34
編集後記	 34

退任教授記念送別会

第二の人生の門出を祝い、
今後益々のご活躍を願う

医学部同窓会・刀城クラブ
会長 飯野 佑一 (昭46卒)



皆さん、本日はお忙しい中、退任教授記念送別会に多数ご出席くださりましてありがとうございます。今回は5名の教授の方々が定年退任されます。群馬大学大学院医学系研究科眼科学分野、岸 章治教授、群馬大学大学院医学系研究科整形外科学、高岸憲二教授、群馬大学大学院保健学研究科、福田利夫教授、群馬大学生体調節研究所(シグナル伝達分野)、岡島史和教授、群馬大学生体調節研究所(細胞調節分野)、小島 至教授であります。5名の先生方この度はご退任おめでとうございます。そして長い間ご苦勞様でした。5名の先生方はいずれも多大なご功績を残され、高く評価されております。また、同窓会に対しましても何かとご支援、御鞭撻を頂きました。先生方のご功績をたたえますとともにご尽力に対して心より御礼申しあげます。それでは5名の教授のご略歴とご功績の一端を紹介させていただきます。

岸 章治教授は昭和51年(1976)3月群馬大学医学部を卒業し、4月に群馬大学医学部眼科学教室に入局されました。同年7月に医学部教務員、昭和53年10月より佐久総合病院眼科勤務、昭和54年4月に群馬大学医学部附属病院助手になりました。2年後の昭和56年6月より米国イリノイ大学眼科研究員として2年間留学されました。昭和58年6月に群馬大学医学部附属病院助手に復職し、昭和59年10月医学部助手、平成5年4月同講師、平成9年12月同助教授、平成10年4月群馬大学医学部眼科学教授に就任されました。平成15年には群馬大学大学院医学系研究科眼科学分野教授になりました。

研究面ではOCT眼底診断、硝子体と黄斑疾患、硝子体と糖尿病網膜症、黄斑手術とOCTなど専門分野で臨床面における実践的研究に力を注がれました。

学会面では日本眼科学会(評議員)、日本網膜硝子体学会(理事)、日本糖尿病眼学会(理事)、日本眼循環学会(理事)、米国眼科アカデミー会員、Macula Society会員(世界の黄斑の専門家、約300人からなるクローズドな会、日本人は10人)、Club Jules Gonin会員(世界の網膜専門家約300人からなるクローズドな会、日本人は10人)など国際的にも広く活躍されています。更に、日本眼科学会賞やアジア太平洋学会におけるOutstanding Service in Prevention of Blindness Awardをはじめ多くの賞を受賞されています。また、2004年、網膜硝子体学会(前橋)、2006年、日本糖尿病眼学会(東京)、2013年、第117回日本眼科学会総会(東京)を主催されました。更に、Ophthalmic Surgery Laser and Imaging, Japanese Journal of OphthalmologyのEditor, 金原出版「眼科」編集委員として活躍されています。社会活動面では2003年—2015年まで、Host of ICO fellowship programで多くの国々から外国人短期留学生を受け入れ、22人のフェローを指導され、貢献されました。

高岸憲二教授は昭和50年3月九州大学医学部を卒業され、6月に九州大学医学部整形外科学教室に入局されました。昭和54年7月米国Columbia大学整形外科留学visiting shoulder fellow, 昭和55年7月同大学visiting research fellowとして研究されました。昭和57年7月九州大学医学部整形外科助手になられ、昭和61年8月北里大学医学部整形外科助教授を経て、平成7年4月同教授に就任されました。その後平成9年4月群馬大学医学部整形外科教授に就任され、平成15年4月群馬大学大学院医学系研究科整形外科学教授になりました。

研究面では、運動器疾患の疫学、肩関節疾患の病態治療、青少年の野球障害に対する予防、関節リウマチの病態治療を研究テーマに研究成果をあげられました。学会面では日本整形外科学会理事、日本整形外科スポーツ医学会代議員、日本肩関節学会代議員、日本人工関節学会評議員、日本リウマチ学会評議員をはじめ多くの学会の役員として活躍され、国際的にも国際整形外科学会会員、Corresponding member of American Shoulder and Elbow

Surgeons. Honorary member of Korean Shoulder and Elbow Surgeonsとして活躍されています。また、日本整形外科スポーツ医学会理事長、Journal of Shoulder and Elbow SurgeryやJournal of Orthopaedic ScienceのAssociate Editorを歴任され、日本整形外科学会編集委員長、日本整形外科学会規約等検討委員会委員長、日本整形外科学会専門医制度委員会委員長としても手腕を発揮されました。開催学会では、1998年、第9回日本リウマチ学会関東支部学術集会会長にはじまり、第30回日本肩関節学会会長、第35回日本整形外科学会スポーツ医学会会長、第26回日本整形外科学会基礎学術集会会長、2013年、第12回国際肩・肘関節学会ICESSES2013(名古屋)などを主催されました。

社会活動面では運動器の10年・日本協会理事、成長期のスポーツ障害予防委員会委員長、独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員、独立行政法人産業技術総合研究所体内埋め込み型材料(積層造形医療機器)開発ワーキンググループ委員として貢献されています。また、学内では平成12年度教務委員長としても活躍されました。

福田利夫教授は昭和51年3月群馬大学医学部を卒業されました。昭和55年3月群馬大学大学院医学系研究科(病理学第2)を終了し、医学博士の学位を授与されました。同年4月群馬大学医学部附属病院医員として、中央検査部で病理細胞診業務に従事。昭和59年6月群馬大学医学部(病理学第2)助手、昭和62年6月同講師、平成8年3月同助教授になりました。平成9年4月群馬大学医学部保健学科(応用検査学)助教授を経て、平成15年4月同教授に就任されました。平成13年1月から3月まで在外研究員として米国テキサス大学ヒューストン校に留学し非上皮性腫瘍の細胞診に関する研究を行いました。平成23年4月に群馬大学大学院保健学研究科教授になりました。

研究面では医学部医学科在籍中はヒトのがん、特に骨・軟部腫瘍を対象とした病理組織学的解析を行い、中間径フィラメント抗体を用いた免疫染色の鑑別診断における有用性を明らかにするとともに、骨・軟部腫瘍に細胞診を応用し、その有用性を確立

しました。保健学科、保健学系研究科在籍中は液化細胞診法に注目し、骨・軟部腫瘍における有用性の証明、更に子宮頸部細胞診への応用を行い、液化細胞診法が診断精度の向上に寄与すること、更に癌発生の直接的原因であるヒト乳頭腫ウイルスやがん関連遺伝子とそのタンパクの解析に応用可能であることを明らかにしました。

学会面では、日本病理学会評議員、日本臨床病理学会評議員として活躍し、日本臨床細胞学会国際交流委員会委員としてタイ、中国及びモンゴルとの細胞診の発展と交流に貢献しています。社会活動として、群馬県健康づくり財団及び高崎地域医療センターの細胞診専門委員、群馬臨床細胞学会会長として、地域における細胞診業務の精度向上、細胞診専門職の卒後教育に貢献されています。

同窓会活動では会報編集委員会委員長として手腕を発揮されておりますし、広報委員会委員、名簿編集委員会委員長として活躍されました。

岡島史和教授は昭和48年(1973)3月北海道大学薬学部を卒業し、昭和53年3月北海道大学薬学部博士課程を修了され、薬学博士号を取得されました。昭和53年4月-昭和55年3月まで米国シダースサイナイメディカルセンターで博士研究員、昭和58年3月北海道大学薬学部薬効学講座助手になりました。昭和58年12月群馬大学内分泌研究所物理化学部門助教授になられ、平成4年6月-平成5年4月まで文部科学省奨励研究員として米国NIHで研究、平成9年6月群馬大学生体調節研究所シグナル伝達分野教授に就任されました。平成14年-平成18年：21世紀COEプログラムチームリーダー、平成19年-平成23年：群馬大学・秋田大学連携グローバルCOEプログラム コアメンバー、平成21年4月-平成27年3月：群馬大学評議員、平成23年4月-平成27年3月：群馬大学生体調節研究所・所長として幅広く活躍されました。

研究面では「生理化学、薬理学を基礎にしたシグナル分子の受容応答機構の解析と病態における役割」を中心に研究され、日本生化学会奨励賞(1988年度)、日本内分泌学会奨励賞(1994年度)を受賞されています。学会面では日本内分泌学会代議員、

日本生化学会評議員、日本脂質生化学会幹事、Editorial Board Member of Archive of Pharmacol Researchとして活躍されています。社会活動面では独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員、名古屋大学環境医学研究所・外部評価委員、筑波大学「博士課程教育リーディングプログラム（ヒューマンバイオロジー学位プログラム）・外部評価委員を歴任され、手腕を発揮されました。

小島 至教授は昭和51年（1976）3月東京大学医学部を卒業されました。昭和53年6月東京大学医学部第一内科に入局し、昭和55年4月には東京大学医学部第4内科助手になりました。昭和57年8月米国エール大学内科客員研究員、昭和60年7月には再び第4内科助手に戻られました。昭和63年6月東京厚生年金病院内科医長を経て、平成元年6月東京大学保健健康センター講師になりました。平成2年5月群馬大学内分泌研究所教授に就任され、平成6年6月に群馬大学生体調節研究所教授になりました。その後、生体調節研究所所長、群馬大学評議

委員を歴任され活躍されました。

研究面ではホルモン・増殖因子・分化誘導因子の作用機構、再生医学を研究テーマに多くの業績を残されました。学会面では日本内分泌学会理事、日本糖尿病学会評議員、日本血管内分泌学会理事、日本細胞生物学会評議員、日本炎症再生医学会評議員として活躍され、内分泌代謝サマーセミナー（伊香保、220名）を主催されました。

社会活動面では厚生科学審議会専門委員、日本学術会議連携委員、革新的先端研究開発支援事業（AMED-CREST）アドバイザーとして力量を発揮され、貢献されました。

このように5名の教授のご功績は大きく目を見張るものがあります。退任されますことは大変残念ではありますが、第二の人生の門出としてお祝い申し上げます。先生方のご健勝と今後益々のご活躍をお祈りいたしますとともに、本学、本同窓会へのご尽力に心より感謝申し上げます。御礼とお祝いの言葉といたします。



退任される小島至教授、岡島史和教授、福田利夫教授、高岸憲二教授、岸章治教授（左より）と飯野同窓会長（平成28年3月3日、刀城会館）

退任あいさつ

母校に感謝

眼科学

教授 岸 章治 (昭51卒)



私が都立高校を卒業した1969年は、学生運動がピークの頃だった。その1月の安田講堂事件で、東大が入試中止に追い込まれた。私は翌年1970年に群大に入学したが、定員80人に2,000人の受験者があり、競争率25倍という激戦だった。1970年は荒牧キャンパスが開校した年でもあった。回りは田んぼと畑ばかりで、キャンパスには植樹されたばかりの若木が植わっていた。5階の教室からは田園風景の向こうに赤城が見え、そのなだらかな斜面の向こうに冠雪した武尊山が見えた。ようやく春が来たという感慨であった。入学式ではさかんに運動部に入ることを勧められた。運動など長らくやってなかったので、サッカー部を見に行ったら、そのままグラウンドに出て練習に参加することになってしまった。これが運命の分かれ道だった。当時の主将は森昌朋先輩（後に第一内科教授）で、同級に中里洋一先輩（後に第一病理教授）がいた。その下に井上洋先輩（後に脳外科助教授、昨年逝去された）がいた。その下の第3学年（昔は学1と呼んでいた）に戸塚恭一さん（後に女子医大感染部教授）がおり、すぐ上の医進2年に竹之下誠一さん（後に福島医大外科教授）がいた。私の同級で最後まで部員を続けたのは、国元文生君（集中治療部准教授）、濱中輝彦君（日本赤十字医療センター眼科部長）、田中陽君（群馬ペインクリニック院長）だった。サッカー部の練習はやたらに厳しかったが、試合にはあまり勝てなかった。勝てるようになったのは、2級下の水口滋之、小野力三郎のコンビが入ってからだった。サッカー部にはアカデミックな雰囲気は全くなかった。しかし、我々が還暦になった2010年に田中君の音頭でニューオータニにかつての部員が集まったが、教授の比率が高いのに驚かされた。

私は清水弘一教授の臨床講義が面白かったので、なんとなく眼科に入った（1976年）。これも運命の岐路であった。清水教授は国際的に有名で、いつも世界を驚かせようとしていた。私は硝子体の解剖という地味な研究をしていたが、1987年に蛍光眼底

造影に使うフルオレセイン色素で硝子体を染色する方法を考案し、黄斑前方の硝子体の液化腔（いわゆる岸ポケット）を発見した。黄斑には黄斑円孔、黄斑前膜、糖尿病網膜症の増殖病変や黄斑浮腫など、硝子体に関係する疾患が好発する。しかし、硝子体の構造がわからなかったため、その発症機序が不明であった。この硝子体ポケットはこれらをきれいに説明できるものであった。私はこの仮説をもとに臨床研究を続けた。1998年に清水教授が退官され、私はその後任になった。眼科では青木平八教授（東大）、清水弘一教授（東大）の後の、はじめての群大卒の教授である。私は群大眼科を日本一にするとひそかに決意した。群大は政治力では旧帝大にかなわない。しかし、学問において日本一になることは可能である。ちょうど、その頃、光干渉断層計（OCT）という装置が発明され、眼底の断面の構造を生体眼で観察できるようになった。余談になるが、最近話題の重力波の発見もOCTでとらえたものである。我々は1997年にOCTの第1号機を群大に設置し、眼の「生体組織」を熱狂的に追究し、現在に至るまで世界をリードする研究を続けている。「OCT眼底診断学」という教科書を群大から出版し、OCTの進歩に応じて第3版まで改訂を重ね、いずれもベストセラーになった。OCTの進歩はめざましく、2012年に出た新世代OCTでは、ついにポケットの全貌が見えるようになった。そしてさまざまな疾患のOCT像が、1990年代に私が描いたシエーマとぴったり一致したのである。硝子体の研究はハーバード大のグループが総本山であった。ポケットの論文は彼らの世界観を否定するものであったが、OCTによりポケット理論の合理性は疑いのないものになった。私が長年、研究を継続できたのは、ずっと母校にいられたお陰である。新しい赴任地で教室を立ち上げる苦勞もしいです。諸先輩、同僚、後輩、そして事務方の協力により、群大は臨床と基礎の研究をするのに最高の環境にある。

群馬大眼科は現在、「網膜のメッカ」と称されている。Maebashiという地名が外人の口から出るとうれしい。教室員が良い論文を出してくれたので、我々は国際的な名声を得た。このお陰で、群大は日本眼科学会を始めとするメジャーな学会の主催校になり、私も主要な賞をすべていただくことができた。これらはいっさい政治活動することなしに達成されたのである。

退任あいさつ

退任にあたって

整形外科学

教授 高岸 憲二(特別会員)



教授としての19年間を振り返ってみますと地方大学医学部臨床教室にとって試練の時期ではありましたが、私にとってはやりがいがあり、自分の真価を発揮できたよい時代に大学教授を勤めさせていただいたと思っています。

当初、教室全体で取り組んだテーマ『軟骨再生』については最初のうちは順調でしたが、「初期臨床研修制度」が始まって教室員が激減して大学院希望者もいなくなったために、道半ばで断念せざるを得ませんでした。教室員の減少により教室員の希望がない病院への派遣はできなくなりました。教室員を増やすために群馬大学整形外科学教室ならびに関連病院整形外科の魅力をどのようにして後期研修医へ伝えるかという点を検討し、若い教室員の意見を取り入れつつ研究などの教室の体制を再構築しました。教室の研究テーマを「片品村における運動器検診」とし、後に「野球検診」を加えました。運動器検診により整形外科では常識と考えられていたことが必ずしも真実ではないことがわかってきましたし、それまで疑問に思ってきたことに対する答えが明らかになり、世界から高い評価をいただいた論文もできました。野球検診については肩関節外科医として野球選手の肩障害の予防をしたいとの気持ちと自分なりに群馬県の活性化に貢献できることを考えて、当時の群馬県高等学校野球連盟理事長に「高校球児へのメディカル面でのサポート」による障害予防と「群馬県の高校野球チームを甲子園大会で優勝させたい。」と私の夢を話したところ、同意していただきました。高校野球の先生方のために指導者講習会を開催するとともに高校野球選手に対するメディカルサポートおよびメディカルチェックを開始しました。一昨年夏の全国高校野球大会で前橋育英高校が優勝したときは、私達の『夢』がかなったと思いましたが、今までの活動に対して高校生からご褒美(力)をいただいたと私はもちろん、群馬大学整形外科学教室員一同喜んでいきます。

教室の運営方針を「大学(関連病院)にいる医師

が自信をもって研究および発表できる環境を整え、それによりスタッフ(ならびに関連病院医師)を魅力ある医師に育てる」および「群馬大学整形外科学教室ならびに関連病院が持っている『魅力』と『夢』を初期研修医に伝える」の2点としました。大切なことは「研究」とともに「人を育てること」であり、高みを目指す群馬大学整形外科学教室にはそれらが必要であり、それぞれが補完し合っていくと考えました。私の在任中に群馬大学内外に教室から3名の教授が誕生しましたので、人材育成という教授の最も重要な任務は果たせたのではないかと考えています。就任当時は教室から世界へ発信する英文論文は数えるほどしかありませんでしたが、英文論文の数も次第に増えていき、教室員が増えるとともに大学院入学希望者も再び増えてきました。

第12回国際肩・肘関節学会や第26回日本整形外科学会基礎学術集会をはじめいくつかの学会を開催させていただきました。日本整形外科学会、『運動器の10年日本協会』および『全日本野球協会』と協力して小学生野球選手の全国規模のアンケート調査を2度行い、練習漬けの毎日を過ごしている選手の実態が明らかになりました。この調査に対しては多くの方々が注目していただき、NHKテレビをはじめ新聞各紙にたびたび取り上げられています。また、肩関節外科医の長年の『夢』であったリバーstype人工肩関節の日本への導入に際してもPMDAの専門委員やガイドライン策定委員会委員長として中心的役割を果たすことができました。

現在、一番うれしいことは群馬大学整形外科学教室の方針・研修体制・研究ならびに臨床活動・雰囲気・将来像などを理解して、私と一緒に働いてくれる医師が整形外科学教室へ多く集まり、基礎研究の重要性を理解する『リサーチマインドを持った腕の立つ整形外科医』集団が形成されてきたことです。

本当に充実したやりがいのある19年間で群馬大学整形外科学教室で過ごすことができました。これも医学部同窓会の先生方をはじめ、教職員の皆様など多くの方々が私の考えを理解し、応援して下さったお蔭だと心から感謝いたします。

最後に群馬大学医学部附属病院は、世間から強い逆風が吹いていますが、残っておられる皆さんで一致団結してこの苦難のときを近い将来乗り越えられることを信じております。19年間お世話になりました。

退任あいさつ

母校と同総会に感謝

保健学研究科

教授 福田 利夫 (昭51卒)



この昭和キャンパス内でも桜の花が満開の今日、平成28年3月31日をもって無事定年を迎えることができ、本日、人事異動通知書を頂きました。群馬大学医学部を卒業して40年間、学生時代を含めると46年間で母校の群馬大学で学生、大学院生、教職員として過ごすことが出来ました。この間、楽しく、大過なく過ごすことができましたのは、同総会の皆様を始めとする恩師、先輩、同僚、後輩の皆様のおかげであり、皆様に改めて感謝申し上げます。

私は昭和51年に群馬大学を卒業すると同時に大学院に進学し、病理学第2で大根田玄寿教授、吉田洋二助教授の指導のもとで病理学の基本を学び、血管病理の研究を行いながら、多数の剖検例を経験し、病理学の本当の面白さを知りました。この時代の研究では動物実験、組織切片の作成と観察、電子顕微鏡標本の作製と観察の全ての行程を自分の手でを行い、病理の本当の楽しさを知ることが出来ました。

大学院卒業後は、附属病院の医員として、当時の中央検査部病理検査室で多数の症例を経験し、病理組織診断のトレーニングを行い、この時に細胞診の重要性に気が付きました。その後、縁あって病理学第2に助手として戻り、町並陸生教授、中島孝教授の下で、腫瘍病理の研究を行いました。町並教授は骨・軟部腫瘍を専門とされ、免疫染色が病理診断に普及し始めた時代で、中島教授は肺癌、子宮頸癌、皮膚癌等を対象とされ、病理診断に遺伝子解析やin

situ hybridization法などが応用され始めた時代でした。この時に細胞診を骨・軟部腫瘍に応用し、細胞診検体を使った免疫染色や分子病理学的研究を行ったことがその後の研究、教育で細胞診をメインとする契機となりました。

保健学科に異動してからは、看護、検査、理学、作業の全専攻の学生を対象とした病理学の講義、検査専攻学生を対象とした病理検査技術の講義と実習で忙しい毎日を過ごすことになりましたが、自分が学生・院生時代に教えられたことを基にして、自らの病理医としての経験を踏まえた教育をできたことに充実感を感じています。保健学科では検査専攻学生を対象とした細胞検査士コースの立ち上げに関わり、多数の細胞検査士を育成し、さらに細胞検査士を大学院に迎えて、病理・細胞診の研究を行うことが出来たのは教員冥利に尽きると思っています。

医学部同総会とは縁あって、平成3年から会報編集委員、平成16年からは会報編集委員長を担当させて頂き、25年間に亘って会報140号から最新の240号まで、通算100号の編集に携わることが出来ました。会報編集委員会では、同総会役員としては初めての試みとして女性委員に参加して頂き、その後は、多数の学生委員を迎え、今日まで和気藹々とした雰囲気会で会報編集を続けて来られたことが楽しい思い出です。この間に、平成10年には同総会ホームページを手作りで立ち上げ、その後は、2回のレイアウト全面更新を行いました。また、名簿編集委員として、平成15年版から平成27年版までの5回の名簿編集に参画することが出来ました。

このように、大学で過ごした期間の半分以上を同総会の皆様とのお縁のお陰で過ごすことが出来たことに感謝しております。これからも同窓会での活動にお役に立てればと思っております。母校の更なる発展をお祈り申し上げます。



満開の桜 (図書館横の丸池・噴水、28年3月31日、筆者撮影)

退任あいさつ

群馬大学での 30年を振り返って

生体調節研究所・シグナル伝達分野
教授 岡島 史和(特別会員)



私は1986年に北海道大学薬学部から当時の内分泌研究所・物理化学部門の助教授として赴任しました。当時の教授は近藤洋一先生です。近藤先生の前任の宇井信生先生は、私の北海道大学時代の恩師の宇井理生先生のお兄さんにあたる方であり、そのような人脈も私の助教授になることにプラスに働いたと思われま。私は北海道大学時代には肝臓を中心に、糖代謝に関連したシグナル伝達機構の研究をおこなっていました。群馬大学に赴任後は内分泌研究所ということもあり、対象が甲状腺の研究になりましたが、シグナル伝達機構の研究は対象が何であれ、普遍化できるメカニズムを追求するのが使命であることから、違和感もなく、研究に邁進できたと考えています。研究所で始めたのはエネルギー運搬分子であるATPのシグナル分子としての機能に関する研究です。生体調節研究所の改組後の1997年にはシグナル伝達分野の教授を担当しました。

教授になってからは、スフィンゴシン1-リン酸という脂質分子の研究にシフトしました。スフィンゴシン1-リン酸といっても普通の研究者はあまり存じ上げないと思いますが、リポタンパク質、なかでも善玉コレステロールともいわれるHDLのことなら、多くの方がご存知と思われま。この脂質分子がHDLの抗動脈硬化作用の一翼を担っていることを実験的に証明しました。私の短所か長所かはわかりませんが、私はほぼ10年たつと、テーマにだんだんワクワク感がなくなってきました。そんなことで、脂質分子受容体研究から派生したプロトン(水素イオン)の研究にシフトしてきました。細胞外pHは生体内ではpH7.4付近に厳密に維持されていますが、炎症部位や虚血部位ではpHが6.0以下になることが知られています。このpH低下によっていろいろな細胞応答がおきますが、その詳細はあまりよくわかっておりません。その細胞応答におけるプロトン感知性受容体の役割に関して、細胞レベル、受容体ノックアウトマウスを用いた研究をこの10年間

の中心テーマとしています。このように、30年間の群馬大学時代はほぼ10年間隔でATP、脂質分子、そして、プロトンと通常は生体の細胞間シグナル伝達分子としてはあまり注目されてこなかった物質の本来の働きとは異なった働きに興味をもち研究をして参りました。

このように研究三昧の生活を30年間、群馬大学でおこなうことができ、非常に感謝しております。定年にあたり研究業績をまとめて気がつきましたが、私が群馬大学にきてからの原書論文は約150ありますが、実に48論文、30%の論文は医学部の諸先生との共同研究の成果です。改めて、医学部の諸先生にお礼を申し上げます。群馬大学には御世話になりっ放しですが、若干の貢献ができたといえ、2002年(平成14年)から6年間続いた21世紀COEプログラム「生体情報の受容伝達と機能発現」のチームリーダーを務めたことかと思ひます。その後、生体調節研究所の小島教授がチームリーダーを務めた秋田大学との連携グローバルCOEにも採択されました。地方大学である群馬大学の存在を世に知らしめることに貢献できたと思っています。当然、医学部の諸先生に参加いただければプログラムの実施は不可能でした。

生体調節研究所の前身の内分泌研究所は、甲状腺疾患が多かったことから1951年に設置された群馬大学医学部附属内分泌研究施設が1963年に昇格したことに始まります。2013年には内分泌研究所から数えて、生体調節研究所設立50周年記念式典をおこなりました。このように医学部は研究所の生みの親というべき存在であり、医学部とはきってもきれない関係かと思っています。内分泌研究所設立当初は当然のことながら、医学部の大学院生の研究の一部を支えていました。その流れは生体調節研究所でも続いており、21世紀COEやグローバルCOEプログラム後も「共同利用共同研究拠点活動」、「生活習慣病に関する概算プロジェクト」でも相互の交流が続いております。今後もこのような大きなプロジェクトのみならず、分野や講座レベルでの交流を通じて、研究所と医学部の良好な関係が是非続く事を祈年しております。このような交流は地方大学の存続にとって大きな力となり、群馬大学のレベルを一層、高めてくれると信じております。今後とも研究所のご支援を宜しくお願い申し上げます。

卒業おめでとう

今こそ 同窓生の団結を

医学部同窓会・刀城クラブ
会長 飯野 佑一 (昭46卒)



卒業生の皆さん、御卒業おめでとうございます。ご家族様のお慶びもいかばかりかと存じます。卒業後は今までに培われた知識を十二分に発揮され、個性豊かな人間として未来へ向かって大きく羽ばたいていただきたいと思ひます。さて、同窓会・刀城クラブは今年で創設64年を迎えました。昭和27年(1952)4月我々の先輩方が母校への熱い思いを持って群馬大学医学部同窓会・刀城クラブを設立されました。刀城の刀は坂東太郎利根川の(利)、刀圭(薬を盛るさじの意転じて医術を表す)に通じ、城は赤城山の城、更に城郭を意味します。母校の西側を流れる利根川、北にそびえる赤城山など周囲の景観も含めいかに先輩方が母校に愛着を持っていたかが解ります。将来の卒業生の「つながり」をそして「団結」を心より願ひ設立して下さったものと思ひます。建物はすべて新しくなりましたが、銀杏並木やヒマラヤスギを見るたびに先輩方の築いてこられた伝統の重みを感じます。

群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ会則の第3条に「本会は、会員相互の親睦と研修を図るとともに、群馬大学医学部の発展に寄与し、併せて学術研究の向上に貢献する事を目的とする。」とあります。基本的には会員相互の親睦を図ることであり、卒業後も「つながり」を続けてゆくことです。全国には同窓会・刀城クラブの支部があり、皆さんの先輩がおられます。支部総会や支部の行事には必ず参加して先輩の方々との親睦を図って下さい。困ったときにはきっと皆さんの力になって下さると思ひます。そして後ろには同窓会・刀城クラブ本部と群馬大学医学部が控えています。なんでも相談して下さい。

群大病院の一連の医療事故問題では、卒業生の皆さんは著しく心を痛めている事でしょう。二度とこのような医療事故を起こさないために、現在、第三者による事故調査委員会と改革委員会において、真相究明と改善策の検討、あるいは病院への提言などが行われており、病院長を中心に信頼回復に向けて頑張っています。同窓会としても群大病院の信頼回復に向けて全力を尽くす所存です。今こそ、同窓生が一丸となって群大病院の信頼回復に気持ちの上でも「団結」すべき時と思ひます。

卒業されてから大切なことが二つあります。それはきちんと挨拶をすることと、時間を守ることです。このことは社会での基本ですが最も重要です。皆さんが個性豊かな人間として、気骨のある人間として今後益々発展されます事を願って御祝いの言葉といたします。



学位記伝達式後の集合写真 (平成28年3月23日 基礎棟前にて)

群馬大学医学部 附属病院の医療事故

— その後の取り組みと今後の支援 —

群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ
会長 飯野 佑一 (昭46卒)
前会長 森川 昭廣 (昭44卒)

はじめに

すでに昨年の本会報238号(平成27年5月31日発行)に会長として“群大病院の信頼回復を願う”というタイトルで、亡くなられた方々へのお悔やみとともに事故の経緯とその調査について報告させていただきました。その後も事故調査委員会や病院当局の努力で更なる事故原因解明についての調査、経緯と病院改革について検討が行なわれ、ホームページに報告されました。特に早急になさなければならない患者様へのよりよい医療提供については、外科・内科診療センターなどの改善策が打ち出されています。すでに報道やホームページで具体的な体制や活動が報告されていますが、今回同窓会会員の皆さま方に本誌を通じてそれらの公表された内容を基盤として現状をご報告し、同窓会として今後行うべきことについての考えをここに示したいと思います。

医療事故調査委員会の設置

平成27年3月に公表された腹腔鏡下肝切除術事故調査委員会報告については種々の指摘があり、平成27年8月10日に、より客観的に調査を行うためにこれまで医学部附属病院に設置した「腹腔鏡下肝切除術事故調査委員会」と「開腹手術事故調査委員会」が統合されました。そして、それぞれの調査を引き継ぐ形で新学長のもと、第三者のみで構成する群馬大学医学部附属病院事故調査委員会が設置されました。本委員会は奈良県総合医療センター総長・上田裕一先生を委員長とし種々の分野の5人の委員から構成されています。医療事故における事実関係の検証、医療事故の原因究明ならびに医学的な結論を踏まえた具体的な再発防止策の提案を行うものとし、現在すでに13回の委員会が開催され今年度内に最終報告されることになっています。

附属病院改革委員会の設立と附属病院改革委員会の提言(中間まとめ)について

事故調査委員会とは別に、群馬大学医学部附属病院改革委員会が設立されました。外部委員7名で構成されています。今回の事故の背景と課題について再発防止のためのガバナンス、診療体制の検証、医療の質保証、安全管理体制等について種々の検討を重ね、昨年10月26日に本院における医療の質保証体制の今後に向けての提言(中間まとめ)をされました。ここでは、今回の医療事故は一個人のみの責

任だけではなく、病院全体のシステムの問題として検討されています。これらの詳細は、群馬大学のホームページにおいてみる事ができるので参照いただきたいとおもいます。

今後について

医療事故調査委員会のさらなる調査(最新調査)との整合性を持った改革委員会での提言により引き続きよりよい体制の検討・実現を行ってゆくことが期待されます。我々同窓会員は、群馬大学医学部附属病院が北関東の医療の中心として築きあげてきた高度な医療の継続とともに、縦割りの診療・管理体制からの脱却、更に各種医療従事者が自由に発言でき、患者さんのために最善の診療体制を構築することを願っています。すでに改革の一部は新しくスタートしていますが、まだまだ欠けている部分も垣間見られます。それらを解決してゆくには同窓会刀城クラブの会員皆様のさらなる御助言と御理解が必要です。母校が新しく生まれ変わり群馬県民の、さらには国民の信頼を得られるよう努力を続けることを期待し、更なる発展を願うものであります。

それでは、会員一人一人に何ができるのでしょうか? 現在、同窓会では、1) 母校への会員の皆様からの今回の医療事故への御意見、2) 母校の危機を乗り切るための提言、3) その他、を募集する事を考えています。皆様の意見が病院の改革に反映されるよう努力したいと思います。そして群馬大学医学部附属病院が一日も早く再度群馬県における高度医療の中心として県民の、更に国民の信頼を回復する事を願っています。私たちは、時代の差こそあれ、母校の北にそびえる赤城山、そして西を流れる利根川という景観の中で友情を育んできた同門であります。時には母校が遠く感じられることもあるかもしれませんが、群馬大学医学部附属病院での医療事故という記事が皆様の怒りをかったかも知れません。それは皆様が築かれてこられた母校の現況からは当然のことでしょう。事故の原因やそれを生み出した診療・管理体制については上述の委員会が精査して明らかにしてくれると思います。今、大学は課せられている多くの問題を乗り越えていかななくてはなりません。より安全かつ高度な大学病院として早急に信頼を回復して診療・教育・研究を続け、地域の医療に大きく貢献することが求められています。そのために必要なのは皆様のご意見、お叱りをいただき、それをもとに病院の新しい体制見直しのご意見として収集し、大学当局にお届けする事であると思います。今こそ病院に対して勇気と活力をあたえる時ではないでしょうか?

皆様のご意見をお手紙で下記にいただき、冊子としてまとめられた段階で、病院当局にお届けしたいと思えます。

〒371-8511 前橋市昭和町3丁目39-22
群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ事務局

新任教授紹介

着任のご挨拶

肝胆膵外科
教授 調 憲 (特別会員)



この度、平成27年11月1日付で群馬大学大学院医学系研究科病態腫瘍制御学講座・肝胆膵外科分野の教授として着任いたしました調憲です。どうぞよろしくお願いいたします。今回、群馬大学医学部同窓会のご高配により、刀城クラブ会報でご挨拶申し上げる機会を賜りました。この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。私の経歴と臨床・研究の取り組みについてご紹介し、私の着任のご挨拶とさせていただきます。

私の苗字はしらべで、珍しい名前です。福岡の南の朝倉市に村人の半分が調という名前の村があり、祖父がその出身です。天皇が御幸されたときに笛の名人がおり、演奏がうまかったのでその名前をいただいたという言い伝えがあるそうです。

私自身は1961年に長崎県長崎市で生まれました。長崎県の青雲高等学校を卒業後、九州大学に入学、昭和61年(1986年)に卒業いたしました。卒業後直ちに杉町圭蔵先生が主宰される第二外科(現消化器・総合外科)に入局いたしました。2年間の研修医生活の後、兼松隆之先生(現長崎大学名誉教授)の肝臓グループに配属され、研究を開始しました。当時、数多くの綺羅星のごときスター外科医がそろっており、諸先生方から薫陶を受ける機会をえられましたことは私にとって大きな財産となっています。

与えられた研究テーマは人工肝臓の開発でしたが、なかなかうまくいかなかったことを記憶しています。当時アメリカのミネソタ大学で人工肝臓の開発が行われており、1990年7月から留学をさせていただきました。ミネソタ大学では、外科の大動物実験室に入入りし、人工肝臓の研究に従事しました。米国での研究をまとめて帰国後に九州大学で医学博士を取得いたしました。

様々な関連病院に勤務し、外科の修練を積みました。とくに思い出深いのは福岡県の飯塚市にある飯塚病院です。5年間にわたり、消化器外科部長として数多くの肝胆膵外科診療に携わりました。年間1300例を超える消化器外科手術の中(急患手術が300例以上)、初年度は50例程度であった肝臓の切除術は5年後には年間100例を超えるようになりました。全国から外科志望の優秀な若者が集っており、

楽しく、一生懸命臨床に取り組んだ日々でした。彼らとは今も交友が続いています。

2009年に九州大学へ帰学し、肝胆膵外科、肝移植外科のチーフとして講師、准教授を経験させていただきました。直属の上司として前原喜彦先生には公私にわたってご指導いただき、お世話になりました。とくに前原先生が会頭を務められた第113回の日本外科学会定期学術集会の運営に携わったことは得がたい経験でした。

基礎研究では肝臓の微小環境や肝再生におけるautophagyの研究などで大学院の研究指導を行い、12名の先生方に学位を取得していただきました。臨床研究では今話題になっているサルコペニア、肝移植後のC型肝炎の制御、新しい肝機能評価法の確立などの研究を行いました。臨床医として、基礎研究で学ぶことができる科学的な考え方は大切です。外科医は手術標本と詳細な臨床情報という大きな武器を持っています。ぜひとも群馬大学でも多くの若い先生方と未来に向けた研究ができればと望んでいます。その結果、一人でも多くのacademic surgeonを育成できれば望外の喜びです。

大学を卒業して、早30年を迎えようとしており、1300例を超える肝切除、300例に近い生体肝移植ドナー・レシピエントの手術、100例を超える胆・膵癌の手術を経験してきました。数多くの人との出会い、成長させていただいたことを心から感謝しています。

今、群馬大学肝胆膵外科に対する信頼が揺らいでいます。それに対する改革として肝胆膵外科講座が新設されました。外科系の診療科が統合された外科診療センターの中でセンター長の桑野博行教授をお支えし、安全性の高い手術を実践し、一人ひとりの患者さんと向き合いながら、誠実に対応し、信頼を取り戻さなければなりません。

また、人口や面積がほぼ同じの栃木県と比較すると群馬県の肝胆膵外科医数は半分以下です。群馬県の肝胆膵外科の育成システムを確立することが喫緊の課題です。群馬大学には肝胆膵外科への情熱を持った若い優秀な外科医たちがいます。彼ら、彼女らと共に安全な臨床の実践と信頼の回復、そして教育が私に与えられた重要なテーマであると感じています。以前先輩から教えていただいたのは新天地に赴任したら、その土地、人、そして職場を愛しなさいということでした。私は群馬を、そして群馬大学を愛します。同窓会の先生方におかれましてはどうかご指導、ご鞭撻、そして支援を賜りますよう心からお願いをいたしまして、私の着任のご挨拶とさせていただきます。

母校に望む ⑤6

群馬大学に臨むこと

利根中央病院

院長 糸賀 俊一 (昭50卒)



私は昭和44年に群馬大学医学部に入学しました。時和50年卒業後、産婦人科医局に入局し、昭和56年に医局の人事で利根中央病院産婦人科医長として現在の病院に赴任しました。利根中央病院で35年間 群馬県の北部の中規模病院で産婦人科医、そして院長として地域医療に携わってきたなかで感じてきたこと、想いなどを述べてみたいと思います。

私の勤務医経験の後半10年近くは 病院の管理部署所属となり、遅ればせながらも日本の医療情勢、国の医療対策などの情報が否応なく提供される立場になり、いかにして病院の経営を守り、地域医療を守っていくための対策にも取り組む必要に迫られるようになりました。利根中央病院は利根保健生活協同組合という医療生協が設立した病院です。医療過疎地であった利根沼田地域に「よい医療を地元で」の期待に応えて昭和30年に「利根中央診療所」を開設したことに始まります。昨年利根保健生活協同組合創立60周年を迎えることができました。昭和63年にはほぼ全診療科を標榜する340床の総合病院となりました。ここまで病院が発展し地域医療に貢献できるようになったのは、病院を支援していただいた、組合員の方の力もありましたが、群馬大学から派遣していただいた多くの診療科の先生方の地域医療に対する想いも大であったと、今更ながら感謝しています。しかし2011年群馬大学からの内科医師派遣中止以後、病院の混乱の中、私は院長に就任し、医師不足の中で診療を継続し、新病院の建設計画を進めるということになりました。経営組織の改革、全国の民医連からの医師支援、職員組合員一丸となって病院再生に頑張ってきました。甲斐あって2015年9月1日、253床の新利根中央病院を開院することができました。今後新病院の経営を安定したものにし、医療の質をさらに向上させ、地域医療に貢献していくには、やはり医師の確保が最重要課題

であると身をもって経験しました。医師不足は改善するどころか非常に困難な状況が今も続いています。これは利根中央病院だけの問題ではなく、全国の地域の中小病院の大きな問題でもあります。医師偏在は診療科にも地域にも存在し、医療法ができて以来の課題でもありますが、いまだに解決されていません。平等な医療を享受できるという国民皆保険制の理念からいえば、医師の偏在問題は近代日本が抱える大きな課題であります。地域の現状は都会では図りきれない絶望的課題となっています。地方医師たちは疲弊して、少ない医師が気力で何とか頑張っているという状態であります。そこで医師偏在が放置される理由を私なりに考えてみます。一つは医師を増加させれば供給が需要を作り出し、医療費の増加が国民の利益を損なうとされた厚生労働省の政策にあります。本当に医師が多くなると医療費が多くなるのか、今の医療費は適正な配分がされているのか誰もまともな議論をしていません。そしてもう一つは研修制度の変更がさらに医師偏在をすすめました。初期研修必修化後、多くの研修医は年を追うごとに大都市の病院での研修を選択し、大学病院の研修医減少を招くことになりました。そして私が今一番心配していることは、今後2017年開始予定の新専門医制度の導入で、専門医になるなら大学病院を核とした大病院を多くの研修医は選択するであろうということです。今後地域の病院の医師不足はこのままでは改善しないどころか、地域医療の崩壊を招きかねません。今後大学病院には、地方の多くの関連病院との連携を積極的に進め、中小病院に勤務しながらも専門医資格が取得できるような制度の確立をぜひとも進めていただきたいということです。最後に私の座右の名としている言葉があります。専門医とはパブリックミッションのある人のことをいう。公的役割がある人である。今の日本の多くの専門医は単なるスキルドテクニシャンだ。医師としてきちんとした教養が無いといけない。専門医と専門家は別である。noblesse oblige—身分の高いものにはそれに伴う責務がある。誰もが休みたい今日のような土曜日の夜でも地域では医療を守っている人たちがいる。その人たちがいる限りnoblesse obligeを求めながら頑張っていきたい。この言葉を忘れず毎日の修練に励んでいただきたいと思います。



病理診断科へようこそ

帝京大学医学部病院病理部

教授 笹島ゆう子 (平3卒)

医学部に入学する学生の多くが目指すのは、いわゆる「お医者さん」や「研究者」です。病理診断を行う病理医（以下「診断病理医」）はその存在すらほとんど知られておらず、実は私も学生の頃は全く知りませんでした。病理といえば、解剖学や組織学の次にやってくる基礎医学で、先生方は研究だけしている病理学研究者だと思っていました。

私は、高崎の開業医の長女として生まれ、祖母の代からの医院を継ぐべく群馬大学に進学しました。転機は4年時の「選択基礎医学実習」で、基礎系講座に数人ずつ割り振られて2週間ほどの実習でしたが、受け入れ講座の中に東京大学医科学研究所ウイルス感染研究部がありました。東京への憧れだけで選んだはずが、「僕たちはこの分野で世界のトップにいる」という自信に満ちた教授の言葉に感動し、将来はこういう世界で生きていきたいと思うようになりました。

卒業後すぐに同研究所病理学研究部に大学院生として進学、森茂郎教授の指導の下、リンパ腫の分子生物学的研究を始めました。しかし、結婚そして長男を出産し、学生という無責任さも手伝って、この頃の私はやる気のない不勉強な9時5時研究者でした。学位はなんとか取得できたものの、そんなことでこの世界生きていけるはずがないと気づいたときは5年目に突入していました。このまま家庭に入ろうかとも思いましたが「君を医師にするまで国民の血税がいくら使われたかわかっているのか」と教授に叱られ、診断病理の道を選ぶことになったのです。

診断病理のトレーニングはNTT東日本関東病院にて、群馬大の先輩でもある松谷章司先生（昭和46年卒）に大変お世話になりました。文字通りゼロからの出発でしたので勉強量も膨大で、これを機に家庭のマネージメントを全て夫に任せることにしました。割り当てられた時間だけ育児や家事をするという生活になったことで、ほぼ毎日

終電までたっぴりと勉強することができました（この状況を認めてくれた夫には今でも心から感謝しています）。

その後昭和大学に2年、国立がん研究センター中央病院に10年、卒後21年目の春、帝京大学に移りました。がんセンター時代に専門領域を婦人科と決めて婦人科腫瘍の病理診断と研究に取り組み、癌取扱規約や「標準病理学」の執筆などにかかわっています。

当節日本の実働病理専門医の数は約2000人、新たに病理専門医になる人は年間たったの60～70人程度です。目指す学生が少ない理由として、そもそも診断病理医の存在を知らない、患者に会わない／治療をしない医者には魅力を感じない、顕微鏡ばかり見ていてイメージが暗い、などが挙げられます。これらを解決するために、帝京大学の病理BSLは診断病理医の存在を教えるところから始まります。病理診断の面白さ、重要さを伝えるのはもちろんですが、コスパ重視の若者対策として、常にベッドフリーなので当直もなくQOLが充実、収入も決して他科に劣らない（どころか近年では他科を超える時給を得られる）ことなどもアピールします。当然ながらこちらの身なりにも気を遣い、みすばらしい服装はNGです。おかげで最近では実習開始時に診断病理医の存在を知らなくても「選択肢の一つになりました」と帰って行く学生も現れています。

さて、せっかく学生がその気になってくれたとしても、とくに私立医大では非医療系の親御さんから反対される、ということがあります。高い学費を払ったのにどうして「医者」にならないのか？と。病理診断および病理医の知名度があまりに低すぎるわけですが、このほど念願叶って診断病理医が主人公のドラマができ（2016年1～3月期フジテレビ系「フラジャイル」）、イケメン俳優が演じてくれました。これで少しは親世代の理解が得られるでしょうか。

いちばん悲しいのは、その存在を知っているにもかかわらず診断病理医への偏見を持つ医療関係者に反対されることです。治療のできない医者を医者とは言えない、儲からない、奇人変人の巣窟だ……。否、病理診断は医療行為ですし、前述の通り時給は他科を超えています。偏屈親父は今ではほとんどいません。40歳以下では女医がむしろ多く、体力的あるいは社会的な男女格差がもっとも現れにくい科の一つであることの証拠だと思います。

というわけで、先生方のご子息、ご令嬢がもし病理に進みたいとおっしゃったら、どうか反対することなくお薦めくださるようお願いし、筆を置きたいと思います。

医療人能力開発センターだより⑭

群馬県地域医療支援センター
の取組み

医療人能力開発センター地域医療支援部門

講師 羽鳥 麗子 (平9卒)



群馬県地域医療支援センターは、医師の県内定着および地域偏在解消を目標に、県内の地域の医師確保を支援するため、平成26年度、群馬県と群馬大学医学部附属病院内に開設されました。平成22年度に設置された前身である地域医療推進研究部門での事業を継続・発展させるとともに、取り組みの4本柱として、『医師のキャリア形成支援』、『医師不足病院の支援』、『医師不足状況等の把握・分析』、『情報発信と相談への対応』を掲げ、“Think Globally, Act Locally－地域医療を支える人材の支援のために”をキャッチコピーに活動を続けています。

その中でも、『医師のキャリア形成支援』を最重要事業と位置付け、医学生、特に、地域医療枠学生に対する支援に力を注いでいます。地域医療枠とは、平成21年度から群馬大学医学部医学科定員増加に伴い、医師の県内定着を図るため、群馬県の緊急医師確保修学資金貸与を条件に設置された入学枠です。特に学業に秀でた方が選抜されており、将来の群馬県における地域医療のリーダーになることが期待されています。当センターでは、彼らの可能性を最大限に活かす礎となるように、地域の医療機関にご協力いただきながら、医学生のための地域医療体験セミナーを企画・開催しています。具体的には、夏、春の学業休暇中に、1日体験型、数日宿泊型、研修病院等を数か所見学するバスツアーなど、それぞれ複数回企画し、各病院の魅力が伝えられるような特色のあるセミナー内容を心がけています。これらの体験セミナーは、地域医療枠学生ばかりでなく、一般枠の医学生や他大学の医学生にも参加を呼びかけ、好評を得ております。

一方、群馬県内からの医学部進学者を増加させるという観点から、高校生に対する啓蒙活動も重要な事業と捉え、医学部進学希望の高校生向け病院体験セミナーも開催しています。夏休みや春休みを利用して、県内の研修病院などにご協力いただきながら、年間100名を越える高校生が参加し、最近では、複

数名のセミナー参加者の医学部進学を確認しています。その他、臨床研修センター、スキルラボセンター、女性医師等教育・支援部門とも密に連携し、卒前・卒後教育および支援に携わらせていただいております。

昨春、地域医療枠学生1期生6名が無事に卒業を迎え、県内で初期研修を開始しました。また、2期生14名がすでに県内の研修病院とのマッチングを終え、4月からの初期研修スタートに向け、準備に余念がないことと思います。地域医療枠学生は、医学科1年生から6年生まで総勢100名を越えています。今後、彼ら及び地域医療への貢献を志す医学生各人の『夢』の実現に向けて、卒後研修や指導体制の整備、キャリアプランの提案を行い、群馬県の地域医療を中心的に担う優れた医師として育成することが急務となっています。平成26年度に作成された『ぐんま地域医療リーダー養成キャリアパス』(<http://www.gmcc.jp/cp/>)では、県内の地域医療をバランスよく経験し、さらに基本領域の専門医取得をめざせるようなキャリアプランが提案されています。当センターでは、地域医療に従事しようとする意欲あふれる若手医師が、県内各地で診療に従事しながら地域医療の第一線でリーダーシップを発揮し活躍できるよう、個々の医師のニーズを最大限に考慮しながらキャリア形成を支援していきたいと考えています。

若手医師がそれぞれの大きな目標に向けて診療に従事する間には、多くの苦労や悩みがあると思われる。初期研修病院の選択、診療科および専門性に関する選択、研究や大学院進学、新専門医制度の導入後の専門医や資格の習得、また、同時期に結婚や出産などプライベートな悩みを持つ医師も少なくないでしょう。当センターでは、まず個々に対するきめ細かな対応が重要と考え、専任医師による個別面談や交流会を定期的に行い、お互いの信頼関係の構築にも力を注いでいます。

当センターでは、医学生、若手医師が、自分の理想とする医師像を追求し、自主的に充実した臨床研修、その後の専門研修を重ねることができるよう、群馬県内の関係機関と提携しながら支援し、群馬県の地域医療のさらなる発展に貢献できるよう邁進したいと考えております。同窓会の皆様におかれましては、当センターの活動に対する引き続きのご支援、ご指導よろしくごお願い申し上げます。

平成27年度パジャジャラン大学交換交流学生の歓迎会

国際交流パジャジャラン大学担当

小山 洋 (昭56卒)

インドネシア・パジャジャラン大学医学部の学生4名が平成27年12月14日(月)から1週間、昭和キャンパスを訪れました。学内外で見学実習を行い、最終日の12月18日(金)には同窓会主催の歓迎会を開催していただき、飯野会長、白倉幹事長をはじめ国際交流委員の石崎教授、リハビリテーション医学の和田教授のご臨席を賜り、両校の学生間の交流が和やかに行われました。(写真①②)

この学生交流は、1996年に群馬大学とインドネシア・パジャジャラン大学との間に結ばれた姉妹校提携に基づくもので、公衆衛生学前教授の鈴木庄亮先生により1998年から開始されています。今回で17回目ということになります。当初より群馬大学医学部同窓会の援助によって支えられてきました。

今回の実習では、医学部附属病院での見学実習の

ほか、重粒子医学センターの見学、県庁訪問、介護老人保健施設「創春館」の視察見学などを行いました。附属病院では麻酔科、循環器内科、脳外科、外科診療センター、手術室、核医学読影室での実習、群馬県庁では保健予防課のご協力で群馬県におけるがんやエイズ、結核対策について現状と課題についてレクチャーをしていただきました。(写真③)

今、昭和キャンパスにはインドネシアをはじめ多くの外国人留学生達が来日しており、医学を学び、研究を行っています。そして医学部学生との交流の機会も増えています。こうした学生交流や共同研究を通じて群馬大学医学部というコミュニティがグローバルな連携を広めていく事は、とても大切な事であると思います。

国際交流の担当としては、今後もこのような学生同士のいい交流の場を作っていきたいと思っています。また、こうした活動を医学部同窓会が力強く支えており、大変意義深いことだと思っています。以上、ありがとうございました。



パジャジャラン大学学生から飯野会長へ記念品贈呈



群馬県健康福祉部保健予防課にて(平成27年12月16日)



歓迎会集合写真(平成27年12月18日 石井ホール)

パジャジャラン大学交換留学実習報告

インドネシアの医療政策

数井真理子 (医学科6年)

私は入学当初から国際保健や医療政策に興味があり、国内で医療政策に力を入れている自治体を訪問したことはあったが、海外の医療政策について現地の人々から直接話を聞いたり医療現場を見たりする機会は無く、渡航費や滞在費を補助してもらえらることもあり、今回このプログラムに参加した。

インドネシアは国民のほとんどがイスラム教徒だが、他にヒンドゥー教徒、キリスト教徒、仏教徒もおり、民族の数も非常に多いため国家のスローガンとして「多様性の中の統一」というのを掲げている。人口は日本の2倍ほどあり、GDPは急速に伸びているが貧富の差も激しい。2014年から、国民皆保険制度が開始された。日本のように初診でもある程度病院を選べるという制度ではなく、プライマリケアを提供する病院、二次的な診療を提供する病院、

専門的な病院という3段階に分かれており、患者は自分の病状に合わせて紹介され、受診することになる。ただし、私立病院も多くあり、経済的に余裕がある人々はそちらを受診することができる。国民皆保険制度は始まったばかりで、まだまだ普及するには時間がかかりそうであった。特に、経済的に余裕がない多くの人々については、年間100円程度の保険料でさえ支払うことに抵抗があり病気になるたらその都度診療費を払う方がいいと考えているらしく、課題が残っている。しかし、インドネシアの医師や医学生は、限られた医療資源の中で適切な診療を行えるようになるために、自分自身の知識や手技の向上に非常に熱心で、日本での学習との違いを日々感じた。私自身にもやるべきことがたくさんあり、一つ一つ目の前のことを頑張っていこうと思った。

安全に全日程を終えることができたことについて、群馬大学公衆衛生学教室の先生方と同窓会、学務課の方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。

パジャジャラン大学との交換留学プログラム で見たインドネシアの医療の今

福田 怜雄 (医学科6年)

2016年1月30日から2月7日までの9日間、パジャジャラン大学交換留学プログラムに参加させていただきましたことについてご報告いたします。私は、以前文献で学んだインドネシアの国民制度と、日本と異なる診療システムについて現地で現況を学ぶことを目標に据えて実習に臨みました。

インドネシアの国民皆保険制度の普及は途上段階で、離島が多いという地理的な要素も然り、国民間の経済的な格差が障害となっており、実際に現地を見た、道で物乞いする人、地域の診療所に集う人々、私立病院にいた裕福な人々とは、それぞれ払えるお金、抱えている問題、医療に求めるものがまるで異なるわけで、字面だけでは理解しきれない現状を体感しました。また、制度の普及に伴い、高いGDP成長率をもってしても将来的な資金確保が問題だとUNPADの医師・学生と議論しましたが、彼らの自国の医療問題についての政治経済的な側面も含めた多面的な考察と各々がもつ独自の見解はとて

も印象的でした。

一方、Health Promotionから母子保健、診療所機能まで一挙に担うPuskesmasを土台にした段階的な診療システムは、予防から専門的な治療を行うまでの各段階の医療資源を適切に国民に分配するために非常に効果的であり、直接的な応用は難しいとはいえ、日本にとってヒントになる仕組みでありました。

UNPADの医学生は卒業後の勤務地を国に長期間統制されるということで、医師偏在が問題となっている日本の今後の医師配置についても考えさせられました。

今回の実習では、実際に街や病院を歩き、患者さんと接し、医師や医学生と顔を合わせて話をすることで、彼らが普段目の当たりにしている日常や、考えていることと同じ目線で向き合うことができました。最後になりましたが、このような貴重な機会を下さいました群馬大学医学部同窓会の皆様、鈴木庄亮名誉教授、小山洋教授をはじめとする公衆衛生学教室の先生方、本プログラムにご協力いただきました全ての方々に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

パジャジャラン大学 交換留学プログラムに参加して

堀越あゆみ (医学科6年)

この度私はパジャジャラン大学交換留学プログラムに参加させていただき、1月30日から2月8日までインドネシアの医療施設や大学で見学・実習してまいりましたので報告させていただきます。

5日間の病院実習期間中に産婦人科、小児科、感染症内科、外科、保健所などを見学させていただきましたが、迷ってしまうほど広い病院内は多くの人で溢れ廊下に座って待っている人がいたり、出生率が高いため産婦人科のベッドは常に満床で2か月のうちに約700人の赤ちゃんが取り上げられるというお話を伺ったりと、常に驚きの連続でした。実習中に特に印象的だったのは保健所の見学です。医師・看護師・助産師が配置される保健所はプライマリケアの中心を担っていて、予防活動や健康のための生活指導も行うという話を伺い、インドネシアにおいて保健所の存在がいかに重要かを改めて感じました。実習最終日にはパジャジャラン大学医学部2年

生の授業に参加させていただきましたが、学生は皆モチベーションが高く、英語を交えた授業でも活発に意見を出し合っていて感銘を受けました。

この交換留学を通してインドネシアの医療の現状を自分の目で見て学ぶことができたと同時に、日本の医療の現状や課題について考える良いきっかけになったと思います。そしてそれぞれの国の医療について同じ医学生として話し合う機会を持てたことはとても貴重な経験だったと感じます。また、パーティーでは多くの学生が気さくに声をかけてくれたり、以前この交換留学プログラムに参加された方々と夕ご飯をご一緒することができたりして、パジャジャラン大学と群馬大学の親交の深さを改めて感じ今後もこの交換留学プログラムが続いてほしいと強く思いました。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えてくださった同窓会の皆様、鈴木庄亮名誉教授、小山洋教授をはじめ公衆衛生学講座の皆様に感謝いたします。この交換留学プログラムで得られた経験を糧にして今後はより一層精進していきたいと思っております。

インドネシア交換留学体験記

和田啓太郎 (医学科6年)

発展途上国において医療がどのように行われているのか興味を持ち、今回パジャジャラン大学との約二週間の交換留学へ参加した。そこで、私たちはハサンサジキンホスピタル、保健所や一次診療所を兼ねた施設であるプスケスマスを訪れた。さらに、パジャジャラン大学の学生寮で、現地の生活を体験した。自身の経験をここに報告する。

1. ハサンサジキンホスピタル

ハサンサジキンホスピタルは三次救急病院に当たる病院だったが、非常に開放的で外との境界がほとんどない病院であった。廊下には多くの人が座り込み、病院内ではデング熱を媒介する蚊が多く飛び交っており、院内の衛生環境が十分でなく、院内感染が心配された。しかし、医療機器は非常に充実しており、そこで働く医師たちや勉強している学生たちも非常に勤勉で、学ぶことに対して貪欲であり、彼らの持つ知識や技術、働く姿勢に感銘を受けた。自分も懸命に頑張らなくてはならないと強く感じた。

2. プスケスマス

プスケスマスは主要な都市に配置されているその

地域の保健、医療を担う重要な施設である。住民に対する予防活動、健康教育、歯科・内科・簡易な外科治療、分娩等を行っており、数床のベッドを有している。1施設当たり1~2人の医師、数人の看護師・助産師によって運営されている。しかし、その数は十分ではなく、人口30万人当たり1つという地域もある。一年間に政府から施設へ支給される運営費は約1千万円であり、医療従事者に支給される給与も低いと、働き手が少ないことも問題であるようだった。

3. 寮での生活

この寮には7人の学生が生活しており、一人一つ部屋が用意されていた。日本文化について聞かれ、特に日本のアニメが好きな学生が多かった。日本に留学を希望する学生も多くいた。シャワーとトイレは数人で共有しており、シャワーについては温かいお湯が出ず、正直最初はかなり驚いた。また、トイレもトイレットペーパーがなく、シャワーで洗う形式であり、少し抵抗があった。

今回、このような貴重な体験をすることができ、留学にご協力してくださった大学の関係者、同窓会の皆様、受け入れてくださったパジャジャラン大学、ハサンサジキンホスピタルの皆様に感謝いたします。

パジャジャラン大学留学思い出 Snap

▼公衆衛生学教室にて (平成28年2月3日)



▲郊外の自然体験施設にて (平成28年1月31日)

▼リハビリテーション医学教室にて (平成28年2月1日)



▲インドネシアの伝統工芸体験 (平成28年2月5日)



▲ウェルカムパーティーにて (平成28年2月1日)

学会報告（同窓会補助）

第22回日本航空医療学会総会

前橋赤十字病院
院長 中野 実(昭57卒)



この度、第22回日本航空医療学会総会を2015年11月5～6日に前橋テルサを会場に開催させていただきました。

日本航空医療学会は、日本における航空機による救急医療システムの確立とその普及および航空機に関連する医学・医療の向上への貢献を目的として、1994年に「日本エアレスキュー研究会」として発足し、2000年に現在の名称の学会となりました。ドクターヘリに関係する医師、看護師、パイロット、整備士、運行会社職員、行政職員、消防職員はもとより、防災ヘリ、県警ヘリ、自衛隊ヘリ・航空機の関係者、および民間航空機の関係者、航空医療関連企業の関係者が会員の会員総数1,500名規模の学会です。

現在、ドクターヘリは全国で38道府県に46機配備されており、前橋赤十字病院を基地病院とする群馬県ドクターヘリは2009年2月に全国で15道府県目の17機目として運営開始され、出動件数・要請件数が全国3位の活動状況であることが、総会開催学会長の任にあずかった理由の1つと思われます。

昨今の航空医療は医療機関だけでなく、消防や警察、自衛隊など様々な機関との連携が不可欠であり、航空医療が目覚ましい発展を遂げてきた背景を再確認し、更なる発展に繋げる意図で、今回の学会のテーマは「空の連携 - 航空医療の飛躍的発展 - 」と致しました。一般演題124題の発表のほか、名誉会長講演、特別講演2題、教育講演1題、1つのワークショップ、2つのシンポジウム、2つのパネルディスカッションを企画し、全国からの参加者総数は550名強と盛会のうちに無事閉会することができました。

今回の学会の開催にあたり、群馬大学医学部同窓会から温かなご支援をいただき、このような大きな会を運営できたことを感謝しております。会を代表して心からお礼申し上げます。

学会報告（同窓会補助）

2015年度 第50回日本高気圧環境・潜水医学会学術集会を開催して

麻酔神経科学
教授 齋藤 繁(昭61卒)



群馬大学大学院医学系研究科脳神経発達統御学講座麻酔神経科学分野では、これまで、手術麻酔・集中治療医学・疼痛学・ペインクリニック・環境医学などに関して臨床的および基礎的研究を続けて参りました。各種疾患に対する高気圧酸素治療も、そうしたプロジェクトの一環として実施しており、現在までに国内外の専門誌にその成果を報告しております。

今回、これまでの活動内容をご評価頂き、2015年度日本高気圧環境・潜水医学会学術集会の当番開催校を拝命致しました。この学会は、本邦において高気圧酸素治療の臨床ならびに基礎研究に従事する医師ならびにコメディカルスタッフにとって、学術交流の中核となるものです。今回の学術集会では、一酸化炭素中毒治療、減圧症治療、がん治療との併用などに焦点をあてました。そして、講演者として国内外から著名な研究者を招聘しました。また、2015年度の学術集会は第50回の記念大会としての開催となりました。当方の高気圧酸素治療室は開設48年目となることから、記念シンポジウムとしてHBO-G48という企画を行い、本学名誉教授、藤田達士先生、後藤文夫先生にもご登壇頂きました。更に、海のない内陸での開催を記念して、高所潜水のワークショップを榛名湖で実施しました。開催日の11月12～14日には会場のラ・シーネ新前橋において350名の方が参加されました。国内学術集会後の11月15日にはアジアパシフィック高気圧環境医学会も昭和キャンパス内刀城会館で開催され、群馬大学重粒子線治療センターならびに群馬大学医学部附属病院高気圧酸素治療室見学会も行われました。

この会の開催にあたりましては、群馬大医学部同窓会から様々なご支援を頂きました。会を代表して深く御礼申し上げます。

学会報告 (同窓会補助)

日本放射線腫瘍学会
第28回学術大会

腫瘍放射線学

教授 中野 隆史 (昭54卒)



この度、私は日本放射線腫瘍学会 (JASTRO) 第28回学術大会を平成27年11月19日 (木) ~21日 (土) に群馬県前橋市の群馬県民会館ベイシアホール・前橋商工会議所において大会長として開催させて頂きました。

紅葉のすすむ晩秋の群馬・前橋での地方開催でしたが、参加者は約2200人と、大変盛況な大会でした。本大会では、高精度放射線治療の成果を放射線生物学研究や腫瘍学研究に、そしてまた臨床にFeedbackすることが大切であると考えFrom bed to bench and backの標語を掲げ、「高精度放射線治療時代の包括的放射線腫瘍学」をメインテーマとしました。そして、放射線治療の理工学的革新と生物学的革新の融合に焦点を当て、粒子線治療をはじめとした最新の放射線治療、オーダーメイド放射線治療をめざしたトランスレーショナル・リサーチの現状、免疫療法併用放射線治療の最前線など、放射線腫瘍学の現在を確認し、未来を展望する構成で企画しました。また、学術大会のグローバル化に対応して国際原子力機関 (IAEA) やアジア放射線腫瘍学連合 (FARO) とのジョイント企画などで国際交流の場を設けました。米国放射線腫瘍学会 (ASTRO) や欧州放射線腫瘍学会 (ESTRO) の会長講演はもとより、ハーバード大学のDr. Zietman、Dr. Held、MDアンダーソン癌センターのDr. Komakiなど、錚々たる面々による基調講演、日中韓シンポジウムも含め、実に計30名以上の海外演者による講演を設定できました。また、国際原子力機関 (IAEA) の天野之弥事務局長からもビデオメッセージをいただき、国際色豊かな学術内容とすることができました。IAEAのアジア地域における医療保健分野の責任者として放射線治療の普及と発展に20数年かかわってきたものとして大きな感慨でした。

放射線腫瘍医を中心とするメディカルスタッフ、放射線生物学者、放射線物理学者などが一同に会して、基礎から臨床へ、臨床から基礎への相互方向の学術的トランスレーションの場を提供できなかったのかと考えています。本大会が来たるべき放射線腫瘍学の発展に微力ながら寄与できる契機となったら幸いです。

学会報告 (同窓会補助)

第28回日本小腸移植研究会
を開催して国立成育医療研究センター
臓器移植センター長

笠原 群生 (平4卒)



平成28年3月12日、第28回日本小腸移植学会をお台場の東京国際交流館で開催させていただきました。参加者112名と臓器移植系の学会では大変多くの参加をいただき、参加者からも有意義な研究会であったとご好評をいただきました。小腸移植は短腸症候群や小腸機能不全により、長期経静脈栄養を要する患者さんに適応されます。わが国では平成8年に京都大学で第1例目を実施され、当時京都大学移植外科研修医として診療に関与させていただきました。その後10余例の小腸移植症例を経験しましたが、小腸の移植成績は大変厳しく、日々の小腸移植後患者さんの管理・その生存率から、非常に難しい医療であると実感いたしました。一方で、腸機能不全患者管理の進歩は著しく、小腸移植も免疫抑制剤使用方法の改良・保存方法の改善等により著しい移植成績の改善も報告されております。国立成育医療研究センターでも臨床小腸移植実施にむけて鋭意努力している次第です。

今回の小腸移植研究会では、わが国の腸管再生医療を担っている東京医科歯科大学消化器内科 渡辺守教授に「難病克服に向けた新しい消化管再生医療」を、国立成育医療研究センター生殖医療研究部の阿久津英憲先生に「小腸と再生医療」をご講演いただきました。巨大なガンダム像・フジテレビ・シルクドソレイユがある最先端のウォーターフロント台場で、活発な討議をいただき盛会に終了できました。

国立成育医療研究センターは世界最多の小児生体肝移植を実施している、世界的に著名な小児臓器移植施設です。小児臓器移植・小児臓器不全治療・救命治療に関心のある医学部学生・同窓会会員の先生がいらっしゃいましたら、是非当センターに見学に行らせてください。

最後に母校である群馬大学医学部同窓会からご支援をいただき、研究会を無事に終了することができました。母校の発展を願うとともに、この度の御支援を心からお礼申し上げます。

支 部 だ よ り

第9回埼玉県支部総会 開催報告

さいたま赤十字病院

副院長 安藤 昭彦 (昭53卒)

平成27年11月14日に行われました第9回埼玉県支部総会の報告をさせていただきます。埼玉県は会員が500名超と大所帯のため東西南北4つのブロックに分け、今年度は“南”の幹事が担当し、大宮サンパレスで開催いたしました。講演会や会合などで定番の大宮パレスホテルとよく間違われますので、開催の案内状に「大宮パレスホテルではございません」と注意書きを入れておきましたが、やはり違う方向に向かわれた先生がいらっしゃいました。それが特別講演をお願いしておりました饗場支部長でしたので、大変ハラハラいたしました。大宮駅で道行く人に尋ねたところその方が勘違いをされたようです。そういうわけで、15分ほど遅れてスタートということになりました。

開会の挨拶の後、「30周年を迎えた御巢鷹山・日航機遭難生存者救出の回顧」と題して饗場庄一先生(S31卒)から特別講演をしていただきました。ともすれば薄れかかった遠い記憶を呼び呼び覚ましてくれるような色褪せない写真の数々とともに、医療

関係者のみならず様々な職種の方たちの生々しい活躍と救護班として現場の真っ只中に出動された先生ならではの秘話ともいえるエピソードを披露していただき、大変興味深い素晴らしい内容の講演となりました。

続いて昨年度の担当幹事東靖宏先生(S39卒)から昨年度の会計報告をしていただいたのち乾杯の発声もお願いして懇親の会が始まりました。1年ぶりの再会を喜び、杯を交わす時間を1時間ほど取った後、年代順に近況報告をしていただきました。出席者は26名でしたので、1人2分をお願いをしましたが、どの先生もしゃべり始めればなかなか止まらず、それはそれなりに楽しいのですが司会進行役としてしばしばストップをかけさせていただくことになりました。申し訳ございませんでした。

そんな中、饗場支部長から「どこの支部もそうだが若い人の出席が少ない(今回の出席者の中央値はS53卒)ので若返りを図る意味でも支部長を若い人と交代したい」との提案がございました。それを受けて、新浪博士先生(S62卒)から星野修一先生(S52卒)を是非にとの推薦があり、満場一致で決まりました。次回は西の幹事が担当で開催される予定ですが、新体制が発足することになると思います。

最後に記念撮影を行いお開きとなりましたが、550名の埼玉県支部会員の皆さん、特に若い先生方には多数参加をしていただくことを切にお願いして報告を終わりたいと思います。



第9回埼玉県支部総会 (平成27年11月14日 大宮サンパレス)

刀城クラブ伊勢崎佐波支部 総会・忘年会報告

伊勢崎佐波支部 岡本 栄一 (昭63卒)

平成27年12月3日(木)午後7時よりプリオパレス伊勢崎にて、恒例の支部総会と忘年会が開催されました。例年、総会には母校より講師をお招きしており、最近の大学の様子や診療・研究の最新情報を知る良い機会となっています。今回は同窓会長の飯野佑一先生をお招きして、昨年来問題となっている、旧第二外科の件について、「群馬大学医学部附属病院の信頼回復を願う」という題名でお話を伺いました。実は飯野先生には平成25年に「同窓会の役割について」というお話をこの場で伺ったばかりでした。今回の件に対して同窓生の関心が非常に強いにも関わらず、情報が少なく、皆、一様に母校の事を憂慮しているという状況から、あえて再度お招きした次第です。飯野先生におかれましてはこのような事情を考慮され、快諾していただきましたことをこの場をお借りしてお礼申し上げる次第です。前回の講演とは異なり、講演する側も聞く側も重苦し

い雰囲気になりかねない話題ではありましたが、新聞報道を交え時系列的に問題点を整理していただき、事の次第と群大病院が現在おかれている状況を理解できたことは有意義であったと思います。

講演の後、植竹先生の乾杯で会が始まりました。卒業年次も専門科も違うとはいえ同窓ならではの共通の話題も多く、和やかな雰囲気の中、最後は荒井先生の締めの挨拶にて終了しました。出席者(敬称略、数字は卒業年)は写真前列左より；草場輝雄(S47)、荒井泰道(S46)、本多隆一(S44)、飯野佑一(S46)、植竹敏(S46)、古作望(S51)、後列左より；岡本栄一(S63)、折原俊夫(S49)、落合亮(H4)、南雲一郎(S56)、小杉廣志(S57)、吉田寿春(S50)、鈴木一也(S60)、南部眞一(S59)、吉川大輔(S55)、鈴木豊(S47)、山本巧(H6)、望月裕文(S56)、小内亨(S59)、木村吉美(S49)、細井勉(S56)、諏訪邦彦(S47)、前田昇三(S58)、新井正明(S61)、塩島正之(S59)、でした。計25名、卒後22年から47年(平均36.7年)でした。5年前の出席者の卒後平均33年に比べて明らかに高齢にシフトしております。今後は若い会員の参加が増えることを期待しております。



刀城クラブ伊勢崎佐波支部総会・忘年会(平成27年12月3日 プリオパレス伊勢崎)

刀城クラブ神奈川支部総会報告

神奈川支部長 長堀 優 (昭58卒)

平成28年3月5日、横浜市内のホテルにおいて、本部より森川昭廣先生（現群馬健康医学振興会理事長）をお招きし、刀城クラブ神奈川支部総会・懇親会が開催された（参加23名）。

総会において、今年度小島巳枝子先生（昭26）のご逝去が報告され、全員で黙祷を捧げた。昨年度総会に元気にご出席された6日目、眠るようにして旅立たれたとのことであった。

この後、森川先生に大学の近況報告とともに乾杯の音頭をとっていただき、懇親会となり、恒例の近況報告がなされた。乃木道男先生（昭34）は東京女子医大で心臓血管外科医として腕を振るっておられた。丸山甫先生は（昭37）精神科医として開業されていた。小原甲一郎先生（昭39）は自衛隊に長く勤務され現在は予防医学協会で健診業務に携わっている。元県立こども医療センター総長の大浜用克先生（昭47）は横浜市の医療行政中枢で活躍された奥様の悦子先生（昭47）共々横浜と沖縄を往復されている。大塚良行先生（昭和50）は外科医として勤務後開業している。渡邊治雄先生（昭50）は国立感染症研究所長として活躍された。西連寺完

茂先生（昭51）は心臓血管外科医として勤務後開業している。古橋彰先生（昭51）は、横浜市を退職し医師、講演業務等をしている。鈴木仁一先生（昭57）は相模原市保健所長を務めている。高橋正純先生（昭58）は横浜市民病院外科部長として消化器がん治療に従事している。藤本修平先生（昭58）は東海大学教授として感染対策などで我々とも関わる。長堀（昭58）は、育生会横浜病院長として地域医療に従事する。田中信正先生（昭59）は脳外科医として勤務後保険会社に勤務している。中山優子先生（昭59）は県立がんセンターで重粒子線治療を担当している。林泰広先生（昭60）は地域の基幹である聖隷横浜病院院長を務めている。都築馨介先生（昭61）は茅ヶ崎市文教大学教授を務めている。瀬崎壯一先生（平1）は整形外科開業の傍らランニングドクターとして活躍している。岩崎俊晴先生（平4）は県立保健福祉大学教授を務めている。神谷雄二先生（平5）は、林院長の下聖隷横浜病院に勤務している。前川出先生（平6）は血液内科へ入局後開業しているが前川名誉教授と血縁はない。大滝真梨香先生（平27）は59卒の父上も刀城会員であり、59卒の田中、中山共々3次会まで参加し多めに盛り上げてくれた。

来年度の総会・懇親会は、平成29年3月4日土曜日に開催される。



刀城会クラブ神奈川支部総会(平成28年3月5日(土) ホテルキャメロットジャパン4階「フロンティア」)
3・4列目左より：長堀、岩崎、田中、都築、大滝、藤本、神谷、林、前川、高橋、瀬崎
2列目左より：西連寺、中山、鈴木、古橋、大塚、大浜(悦)
前列左より：渡邊、小原、乃木、森川、丸山、大浜(用)

クラス会だより

前橋医大3回生クラス会報告

幹事 芹沢 憲一 (昭29卒)

恒例のクラス会が、2015年11月8日上野精養軒で行われた。昨年出席の村上君が亡くなり、更に前日になって生方君が体調を崩して欠席となり5名の会となった。

お互い難聴がすすみ、比較的聴力のよい白寄君が、大声で通訳をしてくれて会話が成立する会となった。集団自衛権容認や、戦争法案が国会を通過した情勢を反映して、お互いの戦時中の学歴が話題になり、5名中3名が海軍兵学校や海軍経理学校に在学中であったことを、初めて聞くことができた。このメンバーで3人が軍隊関係の出身となると、クラス

全員に聞いたら、半数位は軍隊関係だったのか？と思われる。改めて戦争の影響を知らされた。恐らく一年下の群大医学部一回生には、軍隊関係の人は少ないのではないだろうか。

珍しく、野党が一致して「連合政府」を作る提案をした共産党が「元気になってしまったな」などという政治談議にまで発展した。

「戦争なんておこりっこないよ」という意見も出たが、昔のような戦争ではなく、テロにまきこまれる形だろう—そんなことが、話しあわれた。フランスのテロ被害を見て、人ごとではないと思いたい。

参加者が5人になったので、「そろそろ中止を—」と幹事として提案してみたが、全員が続けろという意見になった。出席者は元気だ。これをお読みになった三回生の皆さん、是非努力して参加して下さい。

今回は、2016年11月13日(第2日曜日)正午から上野精養軒で行います。

医大3回生の皆さん、お元気で—。



前橋医大3回生クラス会(平成27年11月8日 上野精養軒)
左より:松本俊雄、白寄暹、阿部忠、芹沢憲一、金古進

20数年振りの東京での 昭和34年卒同窓会

中村 善壽 (昭34卒)

たしか昭和29年に群響をモデルにした映画「ここに泉あり」が公開され、私は灰色の生活をしていた千葉市でその映画を見た。群馬は案外格調高い文化県であることを知った。と同時に当時関東に4つしかない国立の群大医学部に憧憬を抱かされた。我々の時代は大学医学進学コース2年終了後、改めて医学部を受験しなければならず、この制度は31年まで続いた。30年に入学した60人は群馬大が31人、千葉大13人、東北大3人、日大3人、東大2人、北大1人その他である。さらに前年に入学されたが、結核の療養を課された3人がいた。戦後の食糧難の影響を受けた最後の仲間である。千葉大が多いのは1つには医科歯科の進学コースが委嘱されていたことにもよる。そして34年に62名の“34年同

窓会丸”の船出である。学会には群大外科教授・長町幸雄、信州大内科教授・関口守衛、そして長らく同窓会会長として貢献した土屋純がいた。また重粒子線センターへの数百万円の寄付をするなど母校愛に燃える奇妙な仲間もいる。

卒後毎秋に催している同窓会は昨年11月に第56回。最も若い仲間が80歳を迎え、1000万人を超えた超高齢者の仲間入りである。そこでこの節目として、人気のスカイツリー観光を目玉にした同窓会を20数年ぶりに東京で開くことにした。気持ちとして鐘や太鼓で宣伝に努めたが、参加者は生存者37名のうちわずか12名でした。参加する気はあっても、前橋(群馬在18名うち前橋12名)から東京は超高齢者にとって外国のように遠い地になってしまったのか、まさに予想を裏切られた数であった。参加者のうち一見元気そうでも前立腺癌、肝癌、肺癌やステントを挿入しているものなどがおり、同時に先進医学の恩恵にも目を見張った。よる年波には勝てず今年も懐かしい古い顔した3人の仲間がわが“34年同窓丸”の下船を余儀なくされた。



昭和34年卒同窓会 (平成27年11月18日 ホテルグランドヒル市ヶ谷)
後列左より：関根、満川、狩野、中村、渡邊、野上
前列左より：中島、五十嵐、関口、山田、大木、大沢

昭和57年卒同窓会報告

宮坂 牧宏 (昭57卒)

平成27年11月28日に昭和57年卒クラス会が開催されました。なんとなく明るい話題がなく、自粛ムードが漂っている時ではありましたが、私が幹事兼MCを任せられましたからには派手にやらなくてはなりません。そこで、『明るく、元気よく、前向きに』をスローガンとし会場を帝国ホテル東京としました。会場が華やかであったこととアクセスの良さも手伝って、卒後33年にもかかわらず43名もの精鋭が出席してくれました。

中には、沖縄の玉城修君、高知の吉本幸生君など遠方からの参加や、卒業以来と初めてという懐かしい顔ぶれも多数見られました。乾杯の後、村上正巳君の挨拶を経て、第一部の歓談に移りました。

教授、基幹病院長などの重鎮、最前線で頑張る勤務医、地域医療に貢献している開業医など多種多様ですが、同級生同士となれば日頃のストレスなどすべて忘れて、みんな学生時代と変わらないノリとなるから不思議ですね。料理もドリンクも一流でしたので悪酔いをする人は皆無で大いに盛り上がりました。

歓談が一段落した後、田村遵一君から母校の近況についてご報告がありました。

なかなか難題山積のようで、ご尽力には敬服するばかりです。

第二部は各自のスピーチです。MCから予め『後ろ向きの話はNG』とリクエストさせていただいたのですが、その必要がないくらいに、仕事をはじめ

とし、ラグビー、サッカー、マラソン、千里眼、語学、旅行、ダイエット、カジキマグロ、燻製など多岐にわたる『前向きな話』を聞くことができました。各人の個性が十分発揮され、いいお話ばかりでしたが、人数が多かったため十分な時間がとれず、中には話し足りない人もいたようで本当に申し訳ありませんでした。

MCからは各スピーチに関してコメント（ツッコミ？）をさせていただきましたが、大ウケしてくれていましたので嬉しかったですね。コメントはほぼ全てが不適切であったにもかかわらず、寛容に受け止めてくれた同級生の皆様に感謝いたします。

最後はアイドル安部由美子君の締めで一次会はお開きとなりましたが、自粛ムードを吹っ飛ばし、全員が笑顔となり最高のクラス会とすることができました。MCとしては達成感があり大満足です。

二次会はホテル内の会員制バーにて20余名が集まり、話し足りなかった思い出話に花を咲かせました。二次会では横浜で盛業中の稲村幹夫君からの協賛があり、本当に助かりました。

それでも呑み足りない幹事を含めた男女5名はホテルの一室で更なる美酒を堪能したのでした。

あっという間の時間ではありましたが、『群大生は勤勉で、有能であり、みんないい人ばかり』と再認識し、群大の卒業生であることに誇りを持った次第です。

今後は11月の第4土曜日に隔年開催とすることになり、次回は我妻通明君、込谷淳一君が幹事で2017年11月25日に開催されます。ぜひ参加してください。



昭和57年卒同窓会 (平成27年11月28日 帝国ホテル東京)

後列左より：中野、上原、田村、時長、大場、宮澤、松林、林星舟、清水敬親、中山、藤澤、小原、江畑、中村、荒井、樋口
中列左より：村上、黄、鹿沼、稲村、稲葉、河口、大野、片平、伊利、佐野、西ヶ谷、真下、吉本、込谷、長谷川、松浦
前列左より：我妻、李、安部、秋月、宮坂、今城、安川、玉城、柳澤、町田

昭和51年卒クラス会便り

田代 雅彦 (昭51卒)

1月23日、東京ホテルニューオータニにて同窓会が開かれました。当日は19人の参加予定でしたが、東京でも雪が予想される天候で、北海道では大荒れで飛行機が飛ばず北海道大学の教授が欠席となりました。また急患で呼び戻された麻酔科医がおり、欠席となりました。みんなでしっかりと仕事をしているもんだと感心したところです。残念な欠席が重なり若干さみしくなりました。

今回は群大眼科・岸教授、獨協大学・正和教授、京都府立大学・柳沢教授、群大保健学研究科・福田教授の定年退任を記念した会でもありました。

前回は約5年前、そのとき会っていると割合すん

なりと学生時代の顔とつながりますが、しばちく会ってないと誰だったかとわかるのに時間がかかります。今まで何をやってきたかから始まり、今、何をしているのか、この年齢になって、これから何をすべきか？そして、なかなか片付かない？子供たちの話が中心の会となりました。

今回の集合写真を見てください。参加できなかった方は、写真が誰か考えてみてください。次回は5年後では生存人数が減ってしまうのでは？との声も多かったので、3年後の予定となりました。車椅子を用意しておいた方がよいのでは？との声もありましたが、不用になるように…。また、今回は残念なことに女性陣が一人も参加されませんでした。次回に期待しています。

いずれにしても、田中陽先生頼みですが、楽しみにしてください。



昭和51年卒クラス会 (平成28年1月23日、東京ホテルニューオータニ)

後列左より：提箸延幸、田代雅彦、青木直人、西連寺完茂、谷口明、吉村哲、田中陽、玉那覇康一郎、林陸郎
前列左より：山田晴康、古橋彰、森一郎、柳澤昭夫、岸章治、本橋豊、土田桂蔵、長嶋完二

「卒前・卒後一貫 MD-PhDコース」学内リトリート報告

小尾 紀翔 (医学科6年)

平成27年11月8日に行われました学内リトリートに関して、簡単ですがご報告させて頂きたいと思っております。私は前年度も参加させて頂いており、今年2回目の参加となりました。

主な内容といたしまして、ポスター発表会、プレ・正規履修者研究支援プログラムプロジェクト審査などが行われました。どちらもエントリー者は緊張している面持ちでしたが、充実した内容でありました、研究費の補助をいただけるということは、各自の研究を活性化させる上で非常に励みであり、感謝しております。

また私はこの度第8回アジア・オセアニア生理学会の予演をさせていただきました。本学大学院非常勤講師の渋谷メアリー先生からアドバイスを受け、国際学会への参加に大きな自信を与えていただきました。

今回初の試みとして、渋谷メアリー先生に英語論文作成についての講演をしていただきました。学部生を対象としており、大変実践的な内容であったため、非常に充実した講義となりました。今後の論文



メアリー先生による講演

作成に活かしていこうと思います。また卒前・卒後一貫 MD-PhDコース正規履修者の片山彩香さんによる講演も行われ、初期臨床研修と研究の両立やその研究内容について、大変参考になる講演を行っていただきました。

このように本年度の学内リトリートも、多くの学部生やプレ・正規履修者にとって大変有意義な内容であったと思います。素晴らしい機会を用意してくださった方々、また同窓会の皆様がこの場をお借りして感謝を述べたいと思います。



学生によるポスターセッション

医学部代表者及び 新任教授との懇談会報告

医学部同窓会・刀城クラブ

幹事長 白倉 賢二 (昭50卒)

刀城クラブ主催「平成27年度医学部代表者及び新任教授との懇談会」が平成28年2月19日に石井記念ホールにおいて開催されました。本年度の新任教授は平成27年11月に新設となった大学院医学系研究科・病態腫瘍制御学講座・肝胆膵外科学分野の調憲教授と、大学院医学系研究科・社会環境医療学講座・リハビリテーション医学分野の和田直樹教授です。大学からは平塚浩士学長、和泉孝志副学長(理事・研究担当)、峯岸敬医学系研究科長、田村遵一医学部附属病院長(理事・病院担当)、小山徹也教務部会長・同窓会副会長(学術奨学金担当)、同窓会からは飯野佑一会長、饗場庄一元会長(元財団理事長)、山中英壽元会長(元財団理事長)、梅枝定則副会長(財務担当)、西松輝高副会長(総務担当)と28年1月より新しく副会長に就任した猿木和久副会長(将来計画担当)、大山良雄副会長(名簿編集担当)、松崎利行副会長(広報担当)の3名と、込谷淳一会計担当、白倉幹事長(財団常務理事)、成瀬豊同窓会事務長が参加しました。

肝胆膵外科分野は本学に新設された講座・診療科で、調教授は九州大学のご卒業で群馬大学に赴任されて医学部附属病院外科診療センター肝胆膵外科の診療科長を勤めておられます。あいにく当日昼過ぎに救急患者があり緊急手術のために欠席となりました。欠席の知らせのお手紙では急な欠席のお詫びと、赴任して3ヶ月の間、すばらしい環境で診療・研究に専念することが出来、すでに40症例を超える手術を行っていることが記されており、幹事長から参加の皆様へ披露されました。

和田直樹教授は平成7年群馬大学卒業で神経内科学の平井俊策先生の薫陶を受け、さらに東京大学、独協医科大学でリハビリテーション医学の研鑽を積み、平成14年に新設された群馬大学医学部附属病院リハビリテーション部に助教として採用され、同部講師を経て昨年7月に教授に昇格されました。和田教授からは群馬大学で培った能力、技術をさらに磨き、本学では歴史が浅いリハビリテーション医学講座、診療科で研究、診療、教育に努めていくとの挨拶を頂きました。

会場では学長から医学部への期待が述べられ、和泉研究担当理事からは骨軟部腫瘍の重粒子線治療が始めて健康保険の適応になったことなどが披露され、和やかなうちに御ひらきとなりました。両教授のますますのご活躍をお祈りいたします。



医学部代表者及び新任教授との懇談会 (平成28年2月19日 石井記念ホール)

財 団 の ペ ー ジ

財団の公益法人化 2年目を迎えて

公益財団法人 群馬健康医学振興会
理事長 森川 昭廣 (昭44卒)



昨年4月1日に群馬健康医学振興会は、公益財団法人として認定され、新たにスタートを致しました。公益財団法人になるにあたり多くの賛助会員からご寄附をいただきましたこと、そして事務局の方々に種々ご努力いただいた賜と感謝しております。ここに公益法人化に伴っての活動と新たな事業などについてをご報告いたします。

1) 公益財団法人新潟医学振興会訪問

先日、小生と事務方で事務局をお伺いしてまいりましたので、まずそのご報告をいたします。

新潟医学振興会は平成25年4月に公益財団法人となり活発な活動を続けてこられました。

特に多くの浄財を集め、その管理と財団からの教育研究への支援について多くの協力実績をもっておられます。

特に透明化が求められます寄附金の管理区分で助成金の交付方法についてすでにきちんとしたシステムを作っておられます。また医学・医療の教育・研究の推進や振興、さらには教育・研究奨励に活発な事業活動を行っておられました。またそのシステムについても詳細をうかがい、これらを参考にして、我々の財団の更なる活動の活発化に役立てたいと思っています。お世話になった鈴木病院長、荒木事務局長に感謝します。

2) 寄附金控除の適用を受けるための実績

すでにお知らせしたように公益法人は全て税法上の特定公益増進法人に該当し、我々が実施している公益目的事業を支援するために支出された寄附金(法人・個人会員費)については、税制上の優遇制度が認められています。

次頁をご覧になり、本財団へ会員になられますこと、更に御寄附をいただけますようよろしくお願い致します。

3) 学会運営へのご協力

新潟でご教示をいただきました学会運営への協力体制をこれから進めたいと考えています。これについては後程お知らせします。

公益財団法人群馬健康医学振興会 平成27年度賛助会員ご賛同者のご報告

平成27年度賛助会員にご賛同いただき、心より感謝申し上げます。

以下の法人及び個人の方々に、公益財団法人群馬健康医学振興会の賛助会員の趣旨にご賛同いただきましたのでご報告いたします。

27年度新たにご賛同された賛助会員

平成27年12月～平成28年3月迄 受付順(敬称略)

【個人会員】継続

宮真人

【法人会員】継続

医療法人積心会富沢病院

再掲載

平成27年4月～同年11月迄 受付順(敬称略)

【個人会員】新規

戸所正雄、川辺志津子、鈴木忠、笛木直人、猿木和久、木谷泰治、吉澤正夫

【個人会員】継続

牛島義雄、森川昭廣、梅枝定則、根本俊和、白倉賢二、山崎學、乃木道男、鈴木庄亮、安部由美子、蜂谷裕夫、山田邦子、柳川洋子、小和瀬貴律、田中嘉親、永井伊津夫、飯野佑一、山中英壽、福田利夫、饗場庄一、奈良純夫、長嶋起久雄、望月教弘、横江隆夫

【法人会員】新規

下仁田厚生病院、前橋協立病院、医療法人中沢会上毛病院、医療法人相生会わかば病院、三井住友海上火災保険株式会社、医療法人社団日高会、社会医療法人輝城会沼田脳神経外科循環器科病院

【法人会員】継続

医療法人角田病院、社会福祉法人榛桐会はんな・さわらび療育園、株式会社北栄、公益財団法人老年病研究所、医療法人社団三思会くすの木病院、一般財団法人同愛会、医療法人社団善衆会善衆会病院、公立七日市病院、原町赤十字病院、医療法人一羊会上武呼吸器科内科病院、医療法人大和会西毛病院、公立富岡総合病院、医療法人社団東郷会恵愛堂病院、

財団のページ (続き)

【法人会員】 継続 (続き)

医療法人真木会真木病院、公立藤岡総合病院、群馬県済生会前橋病院、医療法人石井会石井病院、藤岡市国民健康保険鬼石病院、桐生厚生総合病院、公益社団法人群馬県医師会群馬リハビリテーション病院、一般財団法人榛名荘、医療法人社団三思会東邦病院、

利根保健生活協同組合利根中央病院、渋川総合病院、社会福祉法人希望の家、医療法人社団美心会、伊勢崎市民病院、医療法人社団ほたか会ほたか病院、吾妻広域町村圏振興整備組合立中之条病院、前橋赤十字病院、館林厚生病院、税理士法人思惟の樹事務所

群馬県からのお知らせ

賛助個人会員には、県・市町村が次の所得税の寄附金控除の中から条例により指定した寄附金について個人住民税の寄附金控除が受けられることの通知がありました。

1 どのような寄附金が対象となるのですか？

都道府県・市町村に対する寄附金（ふるさと寄附金）及び県内住所地の共同募金・日本赤十字社に加えて、都道府県・市区町村が、次の所得税の寄附金控除対象の中から条例により指定した寄附金について、個人住民税の寄附金控除が受けられます。

- ◇指定寄附金（所得税法第78条第2項第2号に基づき財務大臣が指定した寄附金）
- ◇所得税法に規定する規定する次の特定公益増進法人への寄附金
 - 独立行政法人・地方独立行政法人・特殊法人等
 - 公益社団及び**公益財団法人**（新たな公益法人制度に移行する前の法人を含む。）
 - 学校法人・社会福祉法人・更生保護法人
- ◇認定特定公益信託の信託財産とするために支出した金銭
- ◇認定NPO法人又は仮認定NPO法人に対する寄附金
（※国、政党等に対する寄附金は対象になりません。）

※指定対象は都道府県・市区町村により異なりますので、詳細は各都道府県・市区町村にお問い合わせください。

※控除を受けられるのは、寄附金を支払った年の翌年1月1日現在にお住まいの都道府県・市区町村が控除対象寄附金として条例で指定している場合です。

2 どのような控除が受けられますか？

対象となる寄附金のうち2,000円を超える部分に、次の率を乗じた額が寄附をした年の翌年度の住民税額から控除されます。

住所地の都道府県が指定した寄附金……4%（都道府県民税）

住所地の市区町村が指定した寄附金……6%（市区町村民税）

（※住所地の都道府県と市区町村双方が指定した寄附金の場合は10%となります。）

3 控除を受けるためには、どんな手続きが必要ですか？

- ①寄附先の法人等から寄附金受領証明書等を受け取ります。
- ②1月1日～12月31日までに行った寄附金について、翌年の3月15日までに、最寄りの税務署に所得税の確定申告を行います（①の証明書等を添付）。

※住民税の控除のみの適用を受ける場合は、所得税の申告の代わりに、住所地の市区町村に申告します。その場合、所得税の控除は受けられません。

4 いつの税金から控除されますか？

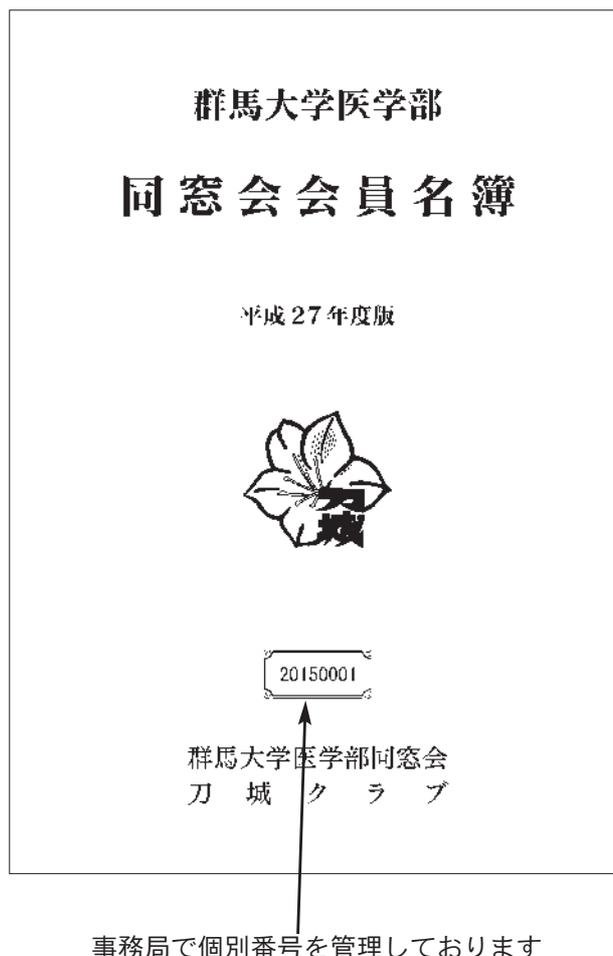
住民税については、寄附した年の翌年度の住民税から控除されます。
所得税については、寄附した年の所得税から控除されます。

平成27年度版同窓会 会員名簿発行のお知らせ

平成27年度版の同窓会会員名簿が完成いたしました。事前にお申し込みされた同窓会員の皆様には、平成28年3月25日付で発送しておりますので、既にお手元に届いていることと思います。平成27年度版の頒布価格は従来通り1万円です。今回より、振り込み方法としまして、郵便局での振り込みに加えましてコンビニエンスストアでの支払いも可能になりました。ぜひ、ご協力をお願い申し上げます。また、これからの会員名簿の入手を検討されている方はお早めに事務局までご連絡ください。事務局にある在庫がなくなり次第、頒布は終了となります。最後に、今回の会員名簿発行が従来より3か月遅れまして年度末になりましたことを深くお詫び申し上げます。

平成27年度版同窓会会員名簿編集委員会

大山良雄（昭63卒、委員長）、福田利夫（昭51卒）、藤田欣一（昭56卒）、安部由美子（昭57卒）、菊地麻美（平7卒）、星野綾美（平13卒）、稲葉美夏（医学科4年）、正古慧子（医学科4年）、吉濱れい（医学科4年）、成瀬豊（事務局）、須田和花早（事務局）



事務局で個別番号を管理しております

役員会だより

第9回役員会（平成27年10月22日）

出席者 梅枝副会長 他17名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 同窓会総会と全国支部長・支部代表者会議について
3. その他

協議事項

1. 卒前・卒後一貫MD-PhDコース学内リトリートへのご支援のお願いについて
2. 会報編集状況について
3. その他

第10回役員会（平成27年11月26日）

出席者 飯野会長 他29名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 医学祭の報告について
3. 新学友会執行部挨拶について
4. その他

協議事項

1. 医学部代表者と新任教授との懇談会について
2. 平成27年度退任教授記念送別会について
3. 学術集会補助金について
4. 学生交換交流プログラム受入・インドネシア訪問について
5. 会報編集状況について
6. 27年度版会員名簿の発行について
7. 役員会忘年慰労会について
8. その他

第11回役員会（平成27年12月24日）

出席者 飯野会長 他21名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 医学部代表者と新任教授との懇談会について
3. 平成27年度退任教授記念送別会について
4. パジャジャラン大学交流学生歓迎会について
5. 伊勢崎・佐波支部総会について
6. その他

協議事項

1. 学術集会補助金について
2. 会報編集状況について
3. その他

第1回役員会 (平成28年1月28日)

出席者 飯野会長 他24名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 文化部長交代の挨拶について
3. その他

協議事項

1. 副会長人事について
2. 平成27年度卒業生に対する記念品について
3. 卒業時同窓会表彰学生の選考について
4. 刀城クラブ表彰・補助金制度規約に関する申し合わせについて
5. 会報編集状況について
6. 名簿編集状況について
7. その他

第2回役員会 (平成28年2月25日)

出席者 飯野会長 他23名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 医学部代表者と新任教授との懇談会について
3. 退任教授記念送別会について
4. その他

協議事項

1. 平成28年度新入生歓迎行事について
2. 学術集会補助金について
3. 会報編集状況について
4. 名簿編集状況について
5. その他

第3回役員会 (平成28年3月24日)

出席者 飯野会長 他19名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 退任教授記念送別会について
3. 新入生オリエンテーションについて
4. 神奈川支部総会について
5. その他

協議事項

1. 会報編集状況について
2. 名簿編集状況について
3. その他



【昇任】平成28年4月1日

日野原 宏 (平5卒) 医学部附属病院集中治療部准教授
 鈴木 信 (平12卒) 医学部附属病院小児外科准教授
 藤生 徹 (平4卒) 医学部附属病院周産母子センター講師
 村松 一洋 (平10卒) 医学部附属病院小児科講師



【昇任】平成28年3月1日

小幡 英章 (昭63卒) 福島県立医科大学附属病院
 痛み緩和医療センター教授

【就任】平成28年4月1日

水沼 英樹 (昭50卒) 福島県立医科大学ふくしま子ども
 ・女性医療支援センター長

謹告

ご逝去の報が同窓会事務局に入りました。
 ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

正会員

昭和30年卒 桑原 弘行先生 (平成26年2月6日逝去)
 昭和35年卒 下斗米英一先生 (平成27年5月1日逝去)
 昭和45年卒 黒川 和泉先生 (平成27年10月29日逝去)
 昭和28年卒 井田 英一先生 (平成27年12月8日逝去)
 昭和23年卒 西田 正道先生 (平成27年12月12日逝去)
 昭和23年卒 小林 節雄先生 (平成27年12月19日逝去)
 昭和35年卒 伊吹 令人先生 (平成27年12月19日逝去)
 昭和35年卒 増田 武弘先生 (平成27年12月23日逝去)
 昭和34年卒 鈴木弥重郎先生 (平成28年1月21日逝去)
 昭和37年卒 高橋 利雄先生 (平成28年2月1日逝去)
 昭和33年卒 今井 勝次先生 (平成28年2月17日逝去)
 昭和34年卒 益子 和夫先生 (平成28年2月17日逝去)
 昭和35年卒 菅野 雄行先生 (平成28年2月26日逝去)
 昭和52年卒 長嶋 一郎先生 (平成28年3月27日逝去)

特別会員

玉田 太朗先生 (平成27年11月26日逝去)

名誉会員

町山 幸輝先生 (平成27年10月12日逝去)

編集後記

今年も桜の花が満開の先々週、入学式、新学期授業開始、同窓会オリエンテーションと新年度の行事が続き、同窓会館の内外のあちこちで新入生歓迎と勧誘の様子が目に入ります。毎年のこととは言え、新年度のすがすがしい雰囲気 campus 内に満ちあふれています。その様子は5月末発行の次号でお知らせするとして、本号は恒例の卒業、定年退任紹介をメイン記事として編集し、附属病院の医療事故については飯野会長、森川前会長からの寄稿を掲載しました。寄稿の末尾に書かれているように、会員の皆様のご意見を是非お寄せ頂ける様お願いいたします。(福田 利夫)

編集委員

福田利夫 (昭51卒)、平戸政史 (昭53卒)、藤田欣一 (昭56卒)、安部由美子 (昭57卒)、大山良雄 (昭63卒)、菊地麻美 (平7卒)、星野綾美 (平13卒)、小尾紀翔 (6年)、稲葉美夏 (4年)、正古慧子 (4年)、吉濱れい (4年)、高橋慶一郎 (3年)、成瀬豊 (事務局)、須田和花早 (事務局)